

14. 5-171



1200501211415

14.5
171

滿鉄調査資料第三十八号
滿洲及北支那に於ける獸骨と骨粉
附録 内地に於ける獸骨及骨粉の供給状況
滿鉄調査部誌



始



滿洲及北支那に於ける獸骨と骨粉

附録「日本内地に於ける獸骨及骨粉の需給狀況」

滿鐵調査課

14.5-171

凡例

一 骨粉は過燐酸石灰と共に燐酸肥料として本邦農家に賞用せられてゐることは言を俟たない。而して、其の供給は多く満洲及北支那より仰いで居る。然るに、是れに關する事情を明にせる好資料を缺けるを以つて、當課は必要に鑑み、課員を満洲及北支那各地に出張せしめ、獸骨及骨粉工業の實情を調査し、本書を上梓した所以である。
尚ほ、附録として日本内地の獸骨及骨粉の需給狀況を掲げて参考に便した。

二 擔當者 課員 石井 正泰

昭和五年八月一日

總務部調査課

參考書

東洋貿易研究 (大阪市役所産業部調査課)

支那の綿業 (馬場欽太郎氏著)

中央試験所報告 第九輯 (滿鐵中央試験所)

奉天商業會議所月報 (奉天商業會議所發行)

奉天經濟二十年史 (奉天商業會議所發行)

凡例

凡例

- 天津商業會議所月報 (天津商業會議所發行)
- 東洋貿易時報 (大阪市役所産業部調査課)
- 輸入獸骨に關する調査書 (長崎税關)
- 蒸製骨粉に就て (滿蒙殖産會社調査)
- 肥料學 (川瀬惣次郎氏著)

以上

滿洲及北支那に於ける獸骨と骨粉

發行所寄贈

目次

第一章 緒言	一
第二章 沿革	三
第一節 滿洲に於ける沿革	三
第二節 北支那に於ける沿革	三
第一項 天津に於ける沿革	三
第二項 青島に於ける沿革	五
第三章 獸骨の産額及出廻狀況	六
第一節 滿洲に於ける産額及出廻狀況	六
第一項 總説	六
一 主要産地及出廻高	六
二 輸送狀況	八



三 出廻時期……………一一

四 運賃……………一二

第二項 南滿洲に於ける出廻状況……………一八

一 大連……………一八

二 營口……………二一

三 遼陽……………二三

四 奉天……………二五

五 開原……………二七

六 鐵嶺……………二八

七 四平街……………三〇

八 公主嶺……………三二

九 長春……………三三

第三項 北滿洲に於ける出廻状況……………三九

一 主要産地……………三九

二 出廻時期及買付方法……………三九

三 輸出數量及金額……………四〇

四 獸骨の相場……………四三

第二節 北支那に於ける産額及出廻状況……………四三

第一項 天津に於ける産額及出廻状況……………四三

一 主要産地及出廻高……………四三

二 出廻時期……………四五

三 輸送状況……………四五

第二項 青島に於ける産額及出廻状況……………四八

一 主要産地及出廻高……………四八

二 運賃……………五〇

第四章 取引慣習……………五三

第一節 滿洲に於ける取引慣習……………五三

第二節 北支那に於ける取引慣習……………五四

第一項 天津に於ける取引慣習……………五四

第二項 青島に於ける取引慣習……………五六

第五章 獸骨の品質及用途 五七

 第一節 品 質 五七

 第二節 用 途 五八

第六章 骨粉工業 五九

 第一節 總 說 五九

 第二節 骨粉の種類 六一

 第一項 粗骨粒 六一

 第二項 粗骨粉 六一

 第三項 蒸製骨粉 六二

 第四項 骨 炭 六四

 第五項 蒸製蹄角粉 六六

 第三節 滿洲に於ける骨粉工業 六七

 第一項 概 說 六七

 第二項 滿蒙殖産株式会社骨粉工場 六八

 第四節 北支那に於ける骨粉工業 七〇

 第一項 天津に於ける骨粉工業 七〇

 一 概 說 七〇

 二 武齊洋行骨粉工場 七二

 三 内外化學肥料公司骨粉工場 七三

 四 清喜洋行骨粉工場 七三

 第二項 青島に於ける骨粉工業 七四

 一 興亞起業株式会社骨粉工場 七五

 二 高橋商會骨粉工場 七六

 三 金子安泰工廠 七六

第七章 獸骨及骨粉の輸出狀況 七八

 第一節 總 說 七八

 第二節 南滿三港輸出狀況 八一

 第三節 天津港輸出狀況 八三

 第四節 青島港輸出狀況 八八

 第五節 其他各港輸出狀況 九一

『附録』 日本内地に於ける獸骨及骨粉の需給狀況……………九五

第一章 獸骨使用の沿革……………九五

第二章 獸骨の輸移入狀況……………九七

 第一節 日本内地に於ける輸移入狀況……………九七

 第二節 鹿兒島に於ける輸移入狀況……………九九

第三章 骨粉の輸移入狀況……………一〇三

 第一節 日本内地に於ける輸移入狀況……………一〇三

 第二節 鹿兒島に於ける輸移入狀況……………一〇四

第四章 骨粉の生産狀況……………一〇五

 第一節 概 説……………一〇五

 第二節 内地に於ける生産狀況……………一〇七

 第三節 鹿兒島に於ける生産狀況……………一一〇

第五章 骨粉の消費狀況……………一一三

 第一節 日本内地に於ける消費狀況……………一一三

 第二節 鹿兒島縣に於ける消費狀況……………一一五

滿洲及北支那に於ける獸骨と骨粉

第一章 緒言

言

獸骨は以前は獸類屠殺者の邪魔物として取扱はれ、其の一小部分が骨細工品の原料として使用さるゝ以外は全くの廢棄物であつた。然るに、近代科學の發達に伴ひ、之が肥料的價値あることを充分に認められ、骨粉工業の興るに及んで、續々市場に搬出され、其製品は盛んに農家の賞用を招くに至つた。獸骨中には磷酸、窒素の二大成分を含有し、殊に他肥料に比し、價格低廉にして、使用法も亦簡便なる處より、其の需要は年々増加の趨勢を示すに至つた。

滿洲及北支那に於て毎年屠殺せらるゝ牛、馬、羊、豚、驢、騾等より生ずる獸骨は極めて多量であるが、重量の割合に價額低廉にして、殊に夏期に於て腐敗し易き爲め、現に市場に出廻るものは舟運竝に鐵道にて運び得らるゝ地方のものに限られてゐる關係上、その量は屠殺數に比し頗る少量である。然れども、今日全支那より産する獸骨の市場に出廻る數量は年約十萬噸に達すと稱せられてゐる。其の主要なる集散地としては、滿洲及北支那に於ては天津、大連、青島、南支那に於ては上海、漢口が最も多額を占めてゐる。此等の地に集散せられたる獸骨は半數以上蒸製骨粉に加工し、他は原骨の儘大部分日本内地に向け輸出されてゐる。

而して、滿洲及北支那に於ける蒸製骨粉の製造工場で昭和五年現在に於て作業中のものは大連一、天津三、青島、濟南合して三、合計七工場である。此外南支那に於て二工場、是等の工場にては年約五萬噸の原料より四萬噸の蒸製骨粉

を製造し主として日本の需要に應じつゝある。

此の全支那總出廻額十萬噸の獸骨中、北支那より出廻る數量は四萬噸内外と稱せられ、天津に出廻るものは清喜洋行、武齊洋行、内外化學肥料の各工場に於て、青島に出廻るものは、安泰工廠、興亞起業、高橋商會等の工場に於て平均七割が蒸製骨粉に加工し、殘餘の三割が原骨の儘日本に輸出せられつゝある、又滿洲より出廻る數は二萬二千噸内外で、約七千噸は營口、安東の二港を経て原骨のまま日本に向け輸出され、一萬五千噸は大連に集り、内七千噸は原骨の儘、残り八千噸内外は大連滿蒙殖産會社骨粉工場に於て蒸製加工されたる後大部分日本内地に輸出せられてゐる。



第二章 沿革

第一節 滿洲に於ける沿革

滿洲に於て集散する獸骨は殆んど牛骨にして、馬、驢、騾、羊、豚等は其の數甚だ少量なるを以つて一般に獸骨を牛骨と呼んでゐる。滿洲に於ける獸骨收拾の歴史は極めて最近の事にして、日露戰爭以前にあつては全く廢物として取扱はれ、唯だ僅かに牛腿骨及脚骨の一部を以つて婦人の修飾品を造る原料となしたるに過ぎなかつたが、戦後邦人の來往頻繁となるに及び、先づ獸骨粉が水田開發上の好個の肥料たる事が認められ、遂に獸骨及骨粉が日本内地其他へ輸出せらるゝの氣運を醸成するに至つたのである。

今昭和三年度當課調査に係る東三省産業統計に據れば、東三省に於ける家畜數は左の如くである。

種 類	遼 寧 省	吉 林 省	黑 龍 江 省	計
牛	四六六六六〇 ^頭	四〇〇、九八〇 ^頭	六五九七五〇 ^頭	一、五二七、三九〇 ^頭
馬	七二三、一〇〇	六三八、四五〇	一〇一九、四〇〇	二、四二五、九五〇
驢	二四六、四〇〇	二六〇、一六〇	一四八、九二〇	六五五、四八〇
騾	三一〇、四一〇	一一一、七五〇	四六〇、〇〇〇	四六八、一六〇
羊	四三三、九九〇	一七五、二一〇	一九三、九八五	二、五四九、〇五〇
豚	三五五、七五〇	三、一九三、三〇〇	一、七八五、八〇〇	七、五三六、六二〇

計

五、七三八、〇八〇

三八二四八五〇

五五九九六五〇

一五、一六二、六五〇

以上の如く東三省には巨額の家畜があり、而して獸肉を以つて主要副食物とする地方にありては、獸骨の生産又多量に上るべき事は勿論であるが、獸骨は緒言に於て述べし如く其の重量に比し價額頗る低廉なる關係により、交通不便なる地方にまで之が搬出範圍を擴むること困難にして、搬出採算可能の範圍外は空しく路傍に放擲せられ、僅かに其の一部が燃料に供せらるゝ如き惜しむべき現狀である。即ち、鐵道を去る二、三日の行程を限度とする以外の奥地産は、殆んど搬出の途なき事情にあるのである。乍然、將來交通運搬に適當の進捗を見るに至れば、頗る有望なる畜産副産物としての位置を造り得べく、化學工業の進歩と共に將來大原料品たるの期を見るに至ることは疑ひを容れない所である。近時、獸骨の内地輸入關係に於て、支那品と競争せる印度品が次第に歐洲方面へ需要の途を開拓しつゝある現狀なれば、今後支那品を以つて之が補充を劃せざるべからざる情勢にあるは、其の將來に一層多大の希望を繋ぎ得るものである。

第二節 北支那に於ける沿革

第一項 天津に於ける沿革

天津も亦滿洲と同じく、獸骨は一般に牛骨と稱されてゐるが、其の實は牛、馬、騾、驢、豚、羊、等の雜骨を含んでゐる。従來支那では獸骨は細工用及び肥料用として、極めて少量の需要があつたのみで、大部分は放棄して顧りみなかつたのであるが、明治三十四年天津の武齊洋行が輸出して以來、始めて商品として認められ、現在では主要輸出品の一

に數へらるゝに至つた。獸骨の需要地は日本内地を主とし、従つて天津に於ける輸出取扱は殆んど邦商の獨占する處である。

天津に於ける獸骨は料骨及灰骨の二種に區別せられてゐる。料骨とは四肢、背骨、頭骨より選出せられ、骨牌、阿片吸入器、扇子骨、刷子柄、小刀柄、簪、象牙代用其他小細工に使用せられ、此等細工用の獸骨は總産額の二〇%乃至三〇%に當り米國、寧波、廣東方面に仕向けられる。料骨以外の雜骨は即ち灰骨にして肥料用、骨粉製造原料として需要せられてゐる。

第二項 青島に於ける沿革

青島に於て獸骨の輸出表上に現れたのは極めて晩近の事にして、其の以前に在つては厘毛の價値なしとして殆んど土中に埋め、或は放棄して顧みるものなく、其の後腿骨の一部が細骨用に供せられたのみであつたが、邦人が來住するに至り、獸骨粉が肥料として價値あることを教へられ、爾來獸骨拾集が各地に於て行はれ、青島、濟南等の都市に於ては骨粉工場が設立され、盛んに日本内地向け輸出さるゝに至つた。

青島より最初に日本内地へ輸出されたのは明治四十四年にして、其の數量は八、九五四擔の少額に過ぎなかつたが、日本の山東鐵道管理時代には十萬擔を突破するの狀勢を示した、山鐵還附以後は漸時減少の趨勢を辿りつゝあるも、支那國內戰爭平定と日本内地の需要如何に依つては今後は可成有望なる貿易品としての地位を築くものと思推せらる。

第三章 獸骨の産額及出廻状況

第一節 滿洲に於ける産額及出廻状況

第一項 總 說

一、主要産地及出廻高

滿蒙至る處獸骨を産出しない地方はない有様で、其の總産額は年約七、八萬噸と稱せられてゐるが、詳細なる統計は之を調査するに困難なる爲め、今茲に正確なる數字を掲ぐることは出来ない。要するに其の多數は前述せる如く採算上搬出不可能の事情にあるものにして、然かも、搬出可能の程度も其の時期に於ける需要の多寡、相場の高低に依つて伸縮する事情にあるから、其の推定さへも、只過去に於ける搬出量によつて概念を求むるに止まるものである。

滿洲に於ける獸骨の集散地帯は奉天、錦州及大連の諸地方で、錦州を中心とする附近、即ち錦縣、高橋、虹螺、石山站方面が其集散量に於ても多數を占めてゐる。が其の多くは天津に出廻るもので、奉天を經由して滿鐵線に出廻るものは其の約四分の一内外と稱されてゐる。

滿鐵線に出廻るものは奉天を第一とし、長春之に亞ぎ、鐵嶺、公主嶺、開原、遼陽、海城等更に之に亞ぐ状態である。奉天に特に搬出量の多いのは錦州産のものを含む關係で、長春積出のものは東支線經由のもの多きに據る。之等出廻品は結局總て海外搬出を目的とするものであるから、其の大部分は大連、營口、安東を經由して日本内地に仕向けら

るのである。今過去に於ける搬出數量を掲げて滿洲各地に於ける出廻の大體を窺知することとする。

滿鐵主要驛獸骨發著數量 (單位米噸)

驛名	大正十三年度		大正十四年度		昭和元年度		昭和二年度		昭和三年度	
	發	著	發	著	發	著	發	著	發	著
大連	四	一四、一五一	三	一五、一九七	一	一七、九九九	一	一六、〇七四		一五、九八五
營口	五〇五	六九	七六七	七五	一、一六八	六二	九二	一九	八一五	五
海城	四七二	六三	六二九	六四	六六四	六四	三五四	三二	四三六	一八
遼陽	八四六	一四八	一、〇五四	一〇四	一、〇五	一八四	八〇四	一三六	八八二	一〇
奉天	二、八七一	三三九	二、六六五	四一四	三、一八二	三〇九	二、八〇八	三〇三	二、七九五	二九〇
鐵嶺	八三九	三三	六六四	七	七六二	三	七八二	一一	六〇四	九
開原	五九八	—	六三四	八	八一六	一三	八一六	—	六二六	一八
四平街	五九五	四〇	四九二	—	六三八	二	五六四	—	四七三	—
公主嶺	六七三	—	六八五	—	一、一九	—	一、九〇	—	一、一九五	—
長春	二、七五五	一七	二、三三三	八	三、二四	四	二、九一七	四	二、九二六	八
吉林	五〇一	—	五三〇	—	六三九	—	六七四	—	六三〇	—
支線	五四五	—	二、〇九四	—	一、八一四	—	一、五七七	—	二、〇二五	—
東順	三八六	四	三九六	—	二七九	—	三八一	—	四二一	—
安撫	一七〇	三	四〇	—	四一	—	—	—	九一	—

第三章 獸骨の産額及出廻状況

昭和三年 年度

一六五〇六・二

二四、九五七・三七四

四五〇

備考 本表年度は四月より翌年三月迄をす。右表に據れば大正十年度は十年前の大正元年度に比し約三倍に増加し、更に六年後の昭和三年度は四倍半と漸次増加の趨勢を示してゐる。

(ロ) 東支鐵道に依る獸骨の輸送状況

本鐵道も亦滿洲にとつて滿鐵に匹敵する重要さを持つてゐる鐵道で、殊に北滿の開発は目覺しいものがあるが故に今後は一層其の重要な度を加ふるべく期待されてゐる。而して、其の南部線は長春に於て滿鐵に接続し、兩者相俟つて、頗る緊密な關係にある、今本鐵道に於ける獸骨の輸送高を年度別に見るに左の如くである。

東支鐵道獸骨總輸送高 (單位米噸—斤換算—、五二斤東支鐵道年報)

年次	輸送數量(米噸)	斤換算	指數
大正八年	九八五	一、四八九・三二〇	一〇〇
同十年	一、一七二	一、七七一・〇六四	一一九
同十三年	二、一一九	三、三三五・二二八	二二五
同十四年	二、三二三	三、五一一・三七六	二三六
同十五年	一、七六三	二、六六五・六五六	一七九
昭和二年	一、四八〇	二、二三七・七六〇	一五〇

尙ほ各區別の發送高を示せば次の如し。

東支鐵道各區別發送高 (單位米噸、東支鐵道年報)

各區別	大正十二年	大正十三年	大正十四年	大正十五年	昭和二年
西部濱管線	一九七	五八五	七六一	四四〇	二五三
哈爾濱管區	八二六	一、二四七	一、二八七	九五七	九六七
東部線	九	一一三	二〇五	一八二	一〇九
南部線	—	九七	一七〇	一八四	一五一
計	一、〇三二	二、〇四二	二、三三三	一、七六三	一、四八〇

備考 本表は一月より十二月迄の計なり

三、出廻時期

獸骨の出廻時期は毎年十月頃より翌年三、四月頃までが最も盛んである。之は冬季に於て肉類の需要盛んなることと、河川結氷、濕地凍結等に依り奥地より鐵道沿線まで搬出するに極めて便宜になる爲であつて、夏季は屠殺數を減ずると共に腐敗し易く、且つ、惡臭夥しい爲搬出が頗る困難なる事情に依るからである。今滿鐵に於ける最近年間に於ける月別輸送高を掲げて其の一般を窺ふこととする。

最近四箇年間獸骨輸送高月別表 (單位米噸)

月次	年度	大正十四年度	昭和元年度	昭和二年度	昭和三年度
四	月	一六〇三・五	三、〇七二・六	二、二一九・四	一、七三三・四

第三章 獸骨の産額及出廻状況

計	三	二	一	十	十	十	九	八	七	六	五
月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月
一六、二一・二	一、四六四・二	二、二七三・一	一、四〇二・〇	一、二八六・二	一、五七四・九	一、一九八・八	一、五三九・〇	六九六・四	八一五・四	一、四〇七・七	一、二一七・一
一八、六九四・八	二、二八〇・〇	八九九・八	一、八六八・六	一、七一六・三	一、二一三・四	一、六四〇・六	五九二・七	六〇四・四	七六七・五	一、三二九・四	二、七〇九・五
一六、六五四・五	三、二四〇・一	一、五三一・二	一、三三八・五	一、三九九・五	一、〇六五・二	一、二七八・八	八〇五・五	三四三・二	六三一・〇	一、一六五・九	一、七八七・二
一六、五〇六・二	三、五一一・八	一、三九八・七	一、九四五・九	一、八〇八・一	一、三二二・九	九六三・二	五〇二・七	四七五・一	五〇九・七	九八九・五	一、三四五・二

備考 滿鐵主要貨物年報に據る。

四、運賃

運賃の高低は直ちに販賣價格に影響を及ぼし、引いては品物の賣行にも影響あるものとして注目する問題である。獸骨の如き他貨物に比し價格低く、競争品のあるものに於ては殊に然りである。今左に滿鐵及び東支鐵道の運賃に就き略述することとする。

(イ) 滿鐵に於ける獸骨の特定運賃

現在の所滿鐵の運賃は、貨物の等級、扱種別、運送料程、數量及運賃率に基いて計算するのを原則としてゐるのであるが、大連埠頭と分水以北の各驛(本溪湖以南を除く)及び安東と姚千戸屯以北の各驛(沙河以南を除く)間には特定運賃が適用されて普通運賃に對し、一割五分乃至三割の割引になつてゐる。滿鐵に於ける現在の獸骨の等級は左の如くである。

- 一級品 なし
- 二級品 骨細工品
- 三級品 骨細工用原料品
- 四級品 其他の雜骨(肥料用)

以上の如き等級別に依り、小口扱、一車扱に分けて、普通運賃率、特定運賃率を適用されてゐるのである。以上の外特に敏速を欲する貨物の輸送には客車便によるを便としてゐるが、獸骨の如き不潔貨物は客車便に依る事は殆んどない。今主なる發送地より大連埠頭著の運賃を示せば左の如し。

滿鐵各驛發大連埠頭著獸骨の運賃表

驛名	新程	小口扱(一〇〇噸に付)				一車扱(一噸に付)				備考
		一級品	二級品	三級品	四級品	一級品	二級品	三級品	四級品	
瓦房店	一〇七・九	〇七九	〇六四	〇五〇	〇三六	五・九	四・七	三・四	二・四	普通
蓋平	二二二・五	一四六	一三八	〇九一	〇六三	九・六	七・八	六・〇	四・九	同
大石橋	二四二・四	一六五	一三三	一〇二	〇七一	一〇・八	八・八	六・七	四・八	同
營口	二六四・八	一七八	一四四	一〇一	〇七六	一一・七	九・五	七・二	五・〇	同
海城	二七四・五	一四二	一三五	〇八八	〇六二	九・六	七・八	六・〇	四・三	特定

立山	遠陽	奉天	鐵嶺	開原	馬河	雙廟	四平	郭家	公家	范屯	長春	撫順	本溪	安東
三二五・五	三三五・二	三九九・五	四七〇・九	五〇四・四	五二五・三	五〇〇・五	五八八・八	六一五・二	六四二・三	六七四・一	七〇四・三	四三六・八	四四五・九	六四四・一
一・五八	一・五八	一・五八	一・七三	一・八五	二・〇二	二・一〇	二・二二	二・四〇	二・五三	二・六三	二・七二	一・六二	二・〇八	三・四五
〇・九八	〇・九八	一・一五	一・三三	一・四〇	一・五〇	一・六〇	一・七〇	一・八三	一九三	一九五	二・〇二	一・三三	一・二八	二・二四
〇・六八	〇・六八	〇・八〇	〇・九二	〇・九七	一・〇五	一・一〇	一・一七	一・二五	一・三三	一・三三	一・四〇	〇・八五	〇・八八	一・四八
一〇・八五	一〇・八五	一二・七八	一五・〇六	一六・三七	一七・五九	一八・五四	一九・六〇	二〇・六九	二一・六六	二二・七四	二三・七二	一三・六〇	一四・五	二三・三
八・八八	八・八八	一〇・五三	一二・三九	一三・三五	一四・〇〇	一四・九四	一五・七五	一六・五八	一七・四二	一八・二七	一九・〇八	一一・一四	一二・一四	一九・〇二
六・六八	六・六八	七・七六	九・一〇	九九・四	一〇・六九	一一・三二	一二・一九	一三・〇〇	一三・三三	一四・四五	一五・三三	八・七三	八・三三	一四・三九
四・七二	四・七二	四・五七	六・五〇	六・九八	七・四一	七・七八	八・二六	八・六〇	八・九八	九・四五	九・八七	六・一一	六・一一	一〇・〇七
特	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

備考 本特定運賃率の設ある區間内を運送する場合に於て遠距離の特定運賃率が近距離の普通運賃率より低廉なるときは近距離運送貨物に對し遠距離に對する本特定運賃率を適用することになつてゐる。

(口) 東支鐵道聯絡特定獸骨の運賃

東支鐵道に於ける獸骨の運賃等級は雜骨に對し、小口扱は十五級品、一車扱は二十七級品である。然し獸骨取扱高は最低重量二二、七〇〇疋なるを以つて聯絡貨物に於ける小口扱は殆んどないと云つてもよい。今滿鐵と協定せる獸骨の聯絡特定運賃率を示せば左の如くである。

東支鐵道各驛より寬城子に至る運賃 (一車扱百疋に付) 金留建

驛名	運賃率	驛名	運賃率
滿洲	一二二・〇九	山	九七・八三
來洲	一一九・六〇	哈	九六・九八
嵯爾	一一七・一〇	拉	九五・八四
赫爾	一一四・六一	基	九五・二七
完固	一一一・二八	基	九四・四二
烏拉	一〇八・七八	屯	九三・五七
海拉	一〇六・二九	子	九二・七二
哈爾	一〇三・七九	子	九二・一五
牙克		圖	八九・八二
兔奴		站	八四・五三
烏伊		溝	七七・四九
興伊		山	七二・二一
博興		子	六八・六八
雅古		濱	六六・九二
巴古		子	六六・九二
哈拉		河	七〇・四四
札蘭		子	七三・九七
成吉		嶺	七七・四九
		甸	七三・九七
		甸	八一・〇一

帽	烏兒	烏吉	一密	葦面	亞沙	石布	高頭	橫嶺	山道	海丹	牡丹
密山	密河	坡河	河尼	子子	子子	子子	子子	子子	子子	子子	子子
八四・五三	八九・八二	九一・五八	九二・一五	九三・〇〇	九三・五七	九三・八五	九四・七〇	九五・二七	九六・四一	九七・二六	九七・八三
磨代	橋	馬	大	細	小	綏	綏	綏	綏	綏	綏
刀	馬	平	平	鱗	綏	綏	綏	綏	綏	綏	綏
石	澆	子	嶺	河	芬	河	家	堡	澆	河	河
九八・四〇	九八・九六	九九・八二	一〇〇・六七	一〇〇・五二	一〇一・八〇	一〇二・三七	一〇三・二二	六一・六四	五八・二二	五二・八三	四九・三一

尙ほ聯絡運賃滿鐵線を掲ぐれば左の如し。

長春	大連	七四・五〇
長春	營口	六三・七〇
長春	安東	六七・九〇

以上は運賃のみであるが輸送に際して尙此外に左の如き諸掛を要する。

滿鐵線諸掛

一、長春—寬城子積換料

一車扱一〇〇砵

一五・二七

二、取卸料

東支線諸掛

同

一・八三

一、驛費

一車扱一〇〇砵

六・一〇

二、積込料

同

二・四四

三、交通事務費

同

一・八三

四、支線費

同

一・五三

計

同

一一・九〇

次

故に昭和四年十二月中に於ける哈爾濱より大連に至る運賃及諸掛を見るに、左の如くである。金留換算は當時一〇〇金留に付日本金一〇五・三〇なるを以つて東支線運賃諸掛は之に依つて換算した。

哈爾濱—寬城子間	一車扱一〇〇砵	七〇・四七
東支線諸掛	同	一一・五三
長春—大連間	同	七四・五〇
滿鐵線諸掛	同	七・一〇
合 計	同	一六四・六〇

右の如く現在東支鐵道の運賃は金留建であるが 實際行使されてゐるのは全部哈爾濱大洋で、運賃拂込の場合は金留を哈大洋に換算してゐる。

第二項 南滿洲に於ける出廻状況

一、大連

大連は滿洲に於ける獸骨集散地中最も注目すべき土地である。即ち滿洲最大の貿易港で、殊に滿洲唯一の獸骨消費場たる滿蒙殖産株式會社骨粉工場を有する關係上、各供給地より發送せられたる獸骨の大部分が此の地に集中されてゐる、又全支那中獸骨の輸出港としても天津に亞ぐ狀態で全支那に於ける獸骨の集散地として最も重要な土地である。以下當地に於ける需給状況を表に依つて觀察することにする。

主要驛發大連到著獸骨數量 (單位米噸)

地方別 驛名	奉天以內各驛					大正十二年 度	大正十三年 度	大正十四年 度	昭和元 年度	昭和二 年度	昭和三 年度
	奉天	撫順	遼陽	營口	州內各驛						
其他各驛	一、三六八	二、七七〇	三、五八	九三六	三五八	五、九七六	一、二七六	一、四八六	一、三三六	九九七	一、〇七三
合計	一、八八	一、九六	一、六二	一、六四	一、三三	一、五三	一、五三	一、五三	一、五三	一、五三	一、五三

地方別 驛名	奉天以內各驛					大正十二年 度	大正十三年 度	大正十四年 度	昭和元 年度	昭和二 年度	昭和三 年度
	奉天	撫順	遼陽	營口	州內各驛						
其他各驛	一、三六八	二、七七〇	三、五八	九三六	三五八	五、九七六	一、二七六	一、四八六	一、三三六	九九七	一、〇七三
合計	一、八八	一、九六	一、六二	一、六四	一、三三	一、五三	一、五三	一、五三	一、五三	一、五三	一、五三

備考 一、滿鐵統計年報に依る。

二、本表年度は毎年四月一日より翌年三月三十一日に至る一箇年間を謂ふ。

右表に依れば年平均一萬五千噸内外大連に集中され約七千噸内外が原骨の儘内地に輸出せられ、約八千噸内外が滿蒙殖産に於て蒸製骨粉に加工され總て日本内地に輸送せらるゝは前記の如くである。

今日本内地各港向獸骨及骨粉の輸出高を示せば左の如し。

第三章 獸骨の産額及出廻状況

日本内地各港向獸骨(骨粉を含む)輸出高表 (單位米噸)

港別	年次					
	大正十二年度	大正十三年度	大正十四年度	昭和元年度	昭和二年度	昭和三年度
新 瀋 陽	1	1,389	576	691	754	3,011
東 京	2,904	617	2,000	1,841	2,466	1,361
清 水	336	449	569	902	539	34
四 日 市	112	224	299	162	137	—
名 古 屋	56	—	114	69	68	—
大 阪	630	502	986	247	366	1,011
神 戶	593	592	1,370	117	—	57
宇 品	—	—	103	11	81	—
下 關、門 司	1,086	267	831	430	334	117
長 崎	969	726	860	558	576	80
鹿 兒 島	1,773	1,683	1,355	1,856	1,587	1,239
合 計	18,479	22,569	22,563	33,125	22,187	17,262

備考 一、滿鐵統計年報に據る。

二、大連到着數量より輸出數量の多いのは大連及其附近より鐵道に依らずして大連に出廻りたるもの竝に貯藏品の輸出に依るものである。

三、本表年度は毎年四月一日より翌年三月三十一日に至る一箇年間を謂ふ。

二、營 口

營口は滿洲最初の且つ唯一の貿易港として、往時は滿洲貿易を全く獨占してゐたのであるが、大連の開港と同時に滿洲の大連中心政策及び冬季結氷の大缺點ある爲めに、其の繁榮を大連に奪はれて、昔年の勢ひなく今日に於ては僅かに安東と伯仲の間にあるに過ぎない、故に獸骨の輸出港としての營口は大連には比較にならぬ貧弱なものである。

の歴史は古く、支那人間の取引關係久しく行はれ來つたのと、又鐵道未發達時代に於ける滿蒙内部への物質輸送の方法として、最も有力な遼河水運の要地にある爲め、今日に於ても殊に支那本部との貿易に於ては頗る重要な地位を占めてゐる。依つて獸骨の集散は相當の數に上つてゐる。以下順次説明することとする。

(イ) 獸骨の主要産地

營口に來集する獸骨の主要産地は遼河沿岸地方及び附近各地にして、又遼西地方殊に錦州、石山、溝帮子、高橋、黒山、石三站等である。

(ロ) 集 散 状 況

前記各地方よりの出廻數量を示せば左の如くである。即ち遼河沿岸地方及び營口附近のものは主として馬車に依り搬入され、遼西地方のものは北寧線によりて河北驛に到着し營口に搬入さる。又、南滿線より到着せる數量は營口線沿線より出廻りたるものである。

營口に出廻りたる獸骨の數量 (單位米噸)

年 次	遼河沿岸より	遼西地方より	營口線沿線より	合 計
馬車に依り	北寧線に依り	南滿線に依り		

第三章 獸骨の産額及出廻状況

昭 和 二 年 度	六四九・八	五五五・五	一六六・六	一二二・九
同 三 年 度	六八〇・三	三七八・四	五七・七	一〇六四・四
同 四 年 度	五三三・〇	四二七・七	七三・三	九六八・〇

備考 營口地方事務所調査。本表年度は四月より翌年三月迄です。

尙ほ昭和四年度北寧線河北驛に到着せる獸骨の發送驛並に其の數量を掲ぐれば左の如くである。

昭和四年度河北驛到着獸骨數量 (單位米噸)

驛名	數量	驛名	數量
芳山	一一・一	石三站	三八・八
高橋	二二・二	石山	一一・一
義縣	二二・二	黑山	六六・六
溝帮子	七七・七	錦州	一六・五
其他	五・五	計	四二七・七

備考 河北驛到着は英噸なるを以つて米噸に換算した。(營口地方事務所調査)

次に營口より輸移出されたる獸骨の數量を掲ぐれば左の如くである。營口線より發送されたるものは主として大連へ仕向けられ、海路輸出されたるものは主として日本内地鹿兒島、宮崎へ仕向けらる。

營口より輸移出されたる獸骨の數量

年次	營口線發送	海路輸出	合計
昭和二年	九一〇・九	三一・九	一二二二・八

同三年	八一九・〇	二四五・〇	一〇六四・〇
同四年	八六五・〇	一一三・五	九七八・五

備考 一、海路輸出されたる數量は擔なるを以つて、之を米噸に換算した。

二、昭和四年度輸出數量は海關第四季輸出表に依る。

三、營口線發送數量は滿鐵統計年報に依る。

四、本表年度は四月より翌年三月迄です。

(ハ) 品質及市價

買付値段は時期及需給によりて異なるも、大體に於て春季安、秋季高の様である。目下昭和五年春季に於ける百斤の相場は金一圓七、八十錢内外である。

品質は概して夾雜物少く、乾燥の程度も割合によく、一般に良好である。

(ニ) 獸骨取扱商店

宮本洋行	營口新市街
滿蒙殖産會社出張所	營口舊市街小紅樓街

三、遼陽

(イ) 獸骨の主要産地

遼陽地方に於ける獸骨は地方農村及遼陽城内にて出來たるものを行商人によつて狩り集めるものなれば、特に主要産地として擧げるものはないが、臺安、遼中縣邊より相當出廻る模様である。

(ロ) 産額及集散状況

産額に就ては其の統計を掲げることには困難であるが、大體に於て遼陽驛の發著數量より考察し、其の發送超過數量が遼陽地方に於ける出廻高と見て大差ないやうである。

遼陽驛獸骨發著數量表 (米噸)

年次	大正十三年度	大正十四年度	昭和元年度	昭和二年度	昭和三年度
到著高	一四八四 ^噸	二〇三・五 ^噸	一八四・四 ^噸	一三六・三 ^噸	一一〇・二 ^噸
發送高	八四五・八	一〇五四・四	一二〇四・八	八四四・〇	八八一・九
發送超過數量	六九七・四	八五〇・九	一、〇二〇・四	六六七・七	七七一・七

最近銀の暴落に依り獸骨の價格著しく低下せる爲、地方行商人に於ても、獸骨の狩り集めに重きを置かず、地方農民も亦價格安き爲め運賃を掛けて搬出するは採算取れず、徒らに放棄するもの多く、最近益々出廻數を減じつゝある状態である。而して、當驛到著の主なる發送地は鞍山、立山、千山等附近中間驛にして、それ等の地方で産出したる獸骨である。又當驛發送は總て大連に仕向けられる。

(ハ) 品質及市價格

品質は夾雜物少なく比較的良好である。最近六箇年間の毎年平均相場は左の如し。

年次	大正十四年	昭和二年	昭和三年	昭和四年	昭和五年
獸骨價格 (日本斤百斤金建)	三・〇〇 ^円	二・七〇	二・八〇	二・七〇	二・七〇 ^円

但し昭和五年は三月中の平均相場なり。

(ニ) 獸骨取扱商店

滿蒙殖産株式会社出張所	城内魚市口街
安藤洋行	同 南街路西

四、奉天

奉天は三百年來滿洲の首都として單に政治上、軍事上の中心たりしに止まらず、經濟的にも滿洲の大中心地點である。今日に於ても政治の中心たる交通上の要地を占めてゐる爲めに益々繁榮に赴き、其の人口九十六萬七千を算し、城内のみにも三十萬を超え滿洲に於ける最大仲繼市場の一である。

(イ) 獸骨主要産地

産地としては普通當地を中心として一〇〇支里内外の地方、即ち獸骨相場の如何に依り、其の搬出に要する馬車賃との採算可能の地方全部より産出さるゝが故に特に産地として擧ぐる必要はない。奉天は産地としてより寧ろ仲繼市場として頗る興味ある土地である。

(ロ) 集散状況

鐵道便として當地方に移輸入せらるゝもの、及び當地方より移輸出せらるゝもの、數量は次の如くである。

第三章 獸骨の産額及出廻状況

奉天發著獸骨數量(單位米噸)

年次	到著數量		計	發送數量		發送超過高
	滿鐵線	京奉線		滿鐵線	京奉線	
大正十二年度	二九一五 ^噸	八八〇〇 ^噸	一二七二五 ^噸	二七八五七 ^噸	—	一六一四 ^噸
同十三年度	三三八七	一八〇〇	五〇八七	二八七〇七	—	二二、三三〇 ^噸
同十四年度	四一三九	三四〇〇	七五三九	二、六六四八	—	一、九一〇 ^噸
昭和元年度	三〇八五	八〇〇	三八八五	三、二八一六	—	二、八九三 ^噸
同二年度	三〇三二	—	三〇三二	二、八〇八一	—	二、五〇四 ^噸
同三年度	二八九七	二八一〇	五七〇七	二、七九五〇	—	二、二四〇 ^噸

備考 奉天地方事務所調査。本表年度は四月より翌年三月迄とす。

即ち右表中發送超過高が奉天に於ける産額と見做して差支ない。而して之が主なる仕向先は大連にして、大連に消費さるゝ外は大連港經由日本内地(主として鹿兒島縣)に輸出せらる。今參考迄に奉天發送、大連埠頭著數量を示せば左の如くである。

奉天發送大連著總數量

大正十二年度	二、七四七 ^噸 ・八	昭和元年度	三、二三〇 ^噸 ・八
同十三年度	二、八〇七 ^噸 ・二	同二年度	二、七九一 ^噸 ・二
同十四年度	二、六〇〇 ^噸 ・二	同三年度	二、七八七 ^噸 ・七

尙ほ奉天到著の獸骨は各地より發送せられたるものにして滿鐵沿線及京奉沿線を其の最も主なるものとする。

(ハ) 市 價

獸骨の市價は銀相場の變動に依つて一定してゐないが昭和四年度に於ける市價は百斤に付金二圓十錢乃至二圓三十錢見當を示してゐた、昭和五年に入つてからは銀の大暴落に伴ひ漸時價格も低下し目下は一圓七、八十錢の見當である。

(ニ) 獸骨取扱店

安藤洋行	城内小西邊門裡
大間知洋行	隅田町九
大和洋行	松島町八
天心洋行	松島町
滿蒙殖産會社出張所	末廣町

五、開原

(イ) 獸骨の主要産地

開原は滿鐵沿線中長春、奉天に次ぐ獸骨の集散地であつて、其の背後地は頗る廣く、西豊、西安、東豊、海龍、盤石、柳河、山城子及通江口等の地方より搬出せられる獸骨の多くは此地に來集する故に其の出廻高は極めて多く、且つ逐年増加の傾向がある。

(ロ) 産額及集散状況

産額の確數に就ては詳でないが、開原驛發送驛數量を以つて當地方の産額と見做すことが出来る、今最近五箇年間の

同驛發送數量を掲ぐれば次の如くである。

開原驛 獸骨發送數量表 (單位噸)	
年次	發送數量
大正十四年度	六三一・四
昭和元年度	八二〇・八
同 二年度	七八八・四
年次	發送數量
昭和三年度	七四三・七
同 四年度	四八四・四

右獸骨は産地より當地獸骨取扱者の手を経て大部分奉天に輸送せられ、一部分は大連に直送せられつゝある。

(ハ) 品質及市價

牛骨は概して佳良なるも、馬、豚には並品が多い。市價は年別調査困難なるも、大體に於て最近五箇年に於ける最高相場は百斤金三圓二十錢にして、現在は金一圓七十錢に低落してゐる。

(ニ) 獸骨取扱商店

巨 益 達	開原拘鹿大街一三四
廣 合 發	同 一三四
順 發 成	同 一四七
三 合 湧	同 三七
德 泰 成	同 三二

六、鐵 嶺

鐵嶺は遼河沿岸樞要の地を占めてゐる故に鐵道開通以前にあつては奉天以北に於ける中心市場であつたが、鐵道開通して開原の勃興するに及び市場は頓と沈衰を來した、然し遼河口たる營口との商業關係及遼河水運の低廉なる運賃とは猶ほ鐵嶺をして重要市場たらしめてゐる。従つて獸骨の出廻高も相當の數に對し滿鐵沿線中長春に亞ぐの狀態である。

(イ) 獸骨の主要産地

當地に於ける主要産地としては鐵嶺城内であるが、鐵嶺百支里以内の地方のものは總て當地に集散せらる。

(ロ) 産額及集散狀態

最近五箇年間に於ける産額の概數を示せば次の如くである。

大正十四年	六五〇、〇〇〇斤	昭和三年	九〇〇、〇〇〇斤
昭和元年	七〇〇、〇〇〇斤	同 四年	一、〇〇〇、〇〇〇斤
同 二年	八二〇、〇〇〇斤		

以上の如く逐年増加の趨勢を示してゐる。然して當地に出廻るものは殆んど大部分奉天に發達せらる。今最近五箇年の同驛發送高を掲ぐれば左の如くである。

鐵嶺驛 獸骨發送高			
年次	發送數量		
大正十三年度	八三九・一	昭和二年度	七八一・七
同 十四年度	六六四・一	同 三年度	六〇三・八
昭和元年度	七六一・五		

第三章 獸骨の産額及出廻状況

備考 本表年度は四月より翌年三月迄とす。

(ハ) 品質及市價

品質は概して良好にして新鮮なるもの多く、現在の平均百斤に付約金一圓九十錢内外である。

(ニ) 獸骨取扱商店

成記 東關小學校下

天合成 南大街

榮記商會 北門裡

七、四 平 街

(イ) 獸骨の主要産地

四平街は滿鐵沿線に於ける新興市場にして、殊に四洮線の開通に依つて其の將來は有望視されてゐる。獸骨の主要産地としては梨樹縣買賣街、八面城、老四平街、下三臺、半拉山門等の舊大都邑を中心とする周圍各村落にして、同地方より産したるものは四平街へ全部出廻り、又昌圖縣鷲鷲樹及び泉頭に産するものは雙廟子へ出廻る、尚ほ榆樹臺より産出するものは從來買賣街を経由して四平街に出廻つて居たが一昨年来より郭家店に出廻ることになつた。これは支那側にて管易道路修築し交通便利になつた爲である。

(ロ) 産額及集散状況

四平街へ出廻る數量は年約八〇〇、〇〇〇斤内外と稱されてゐる、今左に同驛發送高及四洮線聯絡發送高を掲げて其の大體を知ることとする。

四平街驛獸骨發送高 (單位米噸)

驛及び聯絡別	大正十三年度	大正十四年度	昭和元年度	昭和二年度	昭和三年度
四平街驛發送	五九五	四九二	六三八	五六四	四七三
四洮線聯絡發送	六七三	六八五	一一一九	一一九〇	一一九五
合 計	一二六八	一一七七	一七五七	一七五四	一六六八

備考 本表年度は四月より翌年三月迄とす。

而して之等數量は殆んど全部大連向け發送せらる、近時奥地人口増加に伴ひ漸次出廻高増加の傾向がある。

(ハ) 品質及市價

牛、馬、驛、驢、豚の如き稍大形の骨は之を一等品とし、其の他の雜骨は二等品として區別してゐるが、問屋が屑屋より買取るときは一律の相場にて購入してゐる。

當市場に於ける市價は左の如くである。

時 價 四 平 街 百斤金二圓内外

昭和三年頃は百斤金二圓五十錢内外を呈して居たが銀の漸落に比例して獸骨も亦昭和四年には平均二圓二十錢となり現在は二圓に低落した。

(ニ) 獸骨取扱商

天 興 隆

四平街附屬地日進街

第三章 獸骨の産額及出廻状況

第三章 獸骨の産額及出廻状況

華 豐 泰	同	北大街
三 益 興	同	附屬地外支那市街
義 順 隆	同	
雙 順 合	同	
八、公 主 嶺		

(イ) 獸骨主要産地

公主嶺も亦四平街と同じく滿鐵沿線に於ける新興市場にして近來著しく發達を示した、獸骨の主要産地としては左記各地方に最も多く産出する。

伊 通 縣——菅 城、大孤山、小孤山、揚大城子、小城子
懷 德 縣——黑林子、大榆樹

(ロ) 産地及集散状況

最近五箇年間に於ける公主嶺驛發送數量を示せば左の如くである。

大正十三年度	七一六・四	昭和二年度	五九四・四
同 十四年度	六七六・二	同 三年度	四七七・四
昭和元年度	六四五・三		

備考 本表年度とは四月より翌年三月迄とす。

大體に於て右數量が公主嶺に於ける産額と見て差支なく、是等出廻品は殆んど大連向發送せられ一部分奉天へ仕向らる。

(ハ) 品質及市價

品質は上中下の差別なく、百斤(支那秤日本斤換算一斤百五十匁)大洋一圓五十錢内外である。

(ニ) 獸骨取扱商店

永 發 達 公主嶺河岸町

九、長 春

(イ) 獸骨主要産地

長春は滿鐵沿線に於て大連に亞ぐ獸骨の大集散地であつて、其の商業範圍極めて廣く伊通、雙陽、農安、德惠、扶餘、榆樹各縣及長春附近等に産出する獸骨は皆此地に來集する。尙ほ東支及吉長沿線より出る數量も相當の額に達してゐる。

(ロ) 産額及集散状況 (統計總ては長春地方事務所調査)

大正十三年度	二、八二〇・三	昭和二年度	二、九一六・九
同 十四年度	二、二二一・六	同 三年度	二、九二五・七
昭和元年度	三、一二三・八		

備考 本表年度とは四月より翌年三月迄とす以下同じ。

東支、吉長兩線による長春驛打切り及社線より長春驛到着數量

第三章 獸骨の産額及出廻状況

年次	東支南行長春打切	吉長南行長春打切	長春驛到着(社線より)	合計
大正十三年度	六五・三	四七二・〇	一七・五	五五四・八
昭和十四年度	一二三・〇	三二四・〇	六・六	四五三・六
昭和元年度	九八・四	三八六・〇	二・七	四八七・一
同二年度	一四八・〇	三九一・六	三九・二	五七八・八
同三年度	一四・〇	四〇一・五	二一・六	四三七・一

長春驛に於ける東支、吉長、南行中繼數量

年次	東支南行中繼	吉長南行中繼	合計
大正十三年度	二、三五七・〇	五六九・〇	二、九二六・〇
昭和十四年度	二、〇九四・三	四七八・〇	二、五七二・三
昭和元年度	一、八一三・九	四九六・〇	二、三〇九・九
同二年度	一、五七七・一	六七四・〇	二、二五一・一
同三年度	二、〇二五・一	六三〇・一	二、六五五・二

尙ほ昭和三年度に於ける月別長春驛發送南行數量を示せば左の如くである。

長春驛發南行月別發送高

月次	發送噸數	月次	發送噸數
昭和三年四月	二二二・六	昭和三年十一月	一六〇・〇
同五月	二四一・三	同十二月	四六〇・〇
同六月	二二〇・〇	同一年一月	三四〇・〇
同七月	八〇・〇	同二月	三四〇・〇
同八月	六〇・〇	同三月	三四〇・〇
同九月	八〇・〇	計	二、九二五・七
同十月	一四〇・〇		

東支、吉長兩線による長春驛打切及社線より長春驛到着數量月別表

月次	東支南行長春打切	吉長南行長春打切	長春驛著(社線)	合計
昭和三年四月	一四〇	一二三・〇	一	一二三・〇
同五月	一四〇	一二二・五	一	一二二・五
同六月	一四〇	一二三・四	一	一二三・四
同七月	一四〇	一〇・六	一	一四〇
同八月	一四〇	七・二	一	一四〇
同九月	一四〇	七・三	一	一四〇
同十月	一四〇	七・三	一	一四〇
計	一四〇	一二三・〇	一	一二三・〇



地に搬入し來る場合に比して幾分割高となるを免れない。

(ハ) 品質及市價

長春に出廻る獸骨の品質は概して良好なる評はあるが、冬期結氷に際し脂肪及び血液が氷結し、暖氣となるに従ひ解氷し血液の露出する等の缺點を有し、之と對抗する上海、漢口物に比して多少の遜色ありと稱せられてゐる。加ふるに輸出先たる鹿兒島に於ける相場は上海物安値の爲近來滿洲獸骨は採算上不利なる立場に在る。

獸骨の相場は左の如くである。(單位百斤金建)

昭 和 元 年	次	長春市場に於ける獸骨買値	鹿兒島に於ける著荷卸の相場
同 二 年		三圓九十錢	五圓五十錢
同 三 年		三圓七十錢	五圓二十錢
同 四 年		三圓三十錢	四圓七十八錢
運 賃 (百斤に付)		二圓七十八錢	四圓四十錢

長 春——鹿 兒 島
上 海——鹿 兒 島

一圓二十錢
○圓四十錢

今年即ち昭和五年は銀安の爲上海物安値にて内地に輸入さるゝ關係上當地も亦自然相場下落し、従つて出廻りも減少するものと見られてゐる。

(ニ) 獸骨取扱商店

服 部 商 店	長春三笠町四ノ七
滿 蒙 殖 産 出 張 所	同 日本橋通七八
宋 記 商 會	同 城内東三道街

右の内當地と内地(主として鹿兒島)との直取引をなすものは服部商店一軒にして滿蒙殖産は大連に本店を有し他は皆仲買商人である。

第三項 北滿洲に於ける出廻状況

一、主 要 産 地

北滿洲に於ては至る處獸骨を生産するが、主なる生産地は哈爾濱を第一とし、次は海拉爾、阿什河、安達、滿溝地方である。哈爾濱は人口約三十五萬と云はれ骨肉の需要多く、従つて獸骨の生産高も多いが、更に呼海鐵道沿線及松花江岸地方産のものが集るので其の數量も増加する次第である。

海拉爾は北滿第一の家畜市場であり且つ獸肉を主食とする蒙古人の居住多き爲め生産も多く、又阿什河は東支鐵道東部線第一の都市であり人口も六萬人を算し、安達、滿溝は拜泉、克山方面の集散地として出廻高も頗る多い。

二、出廻時期及買付方法

出廻時期は毎年十一月より翌年二月頃まである、此間に出廻の多いのは、此の期間が北滿に於て最も多く獸肉の需要があり、殊に此の間は氣候冷寒である爲取扱が便利であり且つ輸送上にも好都合であるに由る。

買付方法は地方に依り多少の相違はあるが、大體哈爾濱及び其の附近では買付金を前渡し、生産したるものを順次受取ることになつてゐる。換言すれば某商店が一箇年一萬斤の生産を爲してゐるとすれば、内輪に見て九千斤に對する金を契約地の相場に依つて前渡し置き、毎日又は毎月送付し來る分を、引取る時の相場に依つて看貫及検査して受取り之を買方の倉庫又は野積場に運んで來るのである。斯くして目算せし九千斤に達した場合、前渡金が相場の變動に依つて不足なる時は之の不足分を支拂ひ、反對に前渡金に剩餘を生じた場合は剩餘金の返濟を受けず次の契約金に振り替へる仕組になつてゐる。取引の方法が前記の如く前渡の方法に依るのであるから、相手が悪いと前渡金を踏倒され、或は前渡金を持逃げさるゝ場合もあるので、可成り危険な取引方法である。従つて相手の信用なり人物を知つて置く必要がある。過去に於て邦人の獸骨商が多く倒産したのは、多く此の踏倒し、持逃げ、或は又不正品の受取に依るものである。右は哈爾濱及其の附近の取引の方法であるが、哈爾濱以外の土地の場合は要所々々の商人に買付を依頼して蒐集する。此の場合は依託買付を爲すものに對して七、八掛の前金を渡す習慣になつてゐる。一定の數量が纏れば最寄の驛より發送させ、然る後に不足代金の支拂をするのである。

三、輸出數量及金額

北滿に於ける獸骨の輸出は主として骨粉肥料の原料として日本へ輸出されるものであるから、日本に於ける肥料界の動きに伴ひ採算上不利の爲め輸出困難の場合があり、又地方的には南滿が安く北滿が高値を示す場合には北滿物の輸出が激減することもある。之れ必ずしも獸骨に限らず總ての商品に見受けることであるが獸骨に於ては特に其の關係が甚だしい。従つて買付に際して特別の考慮を要するのである。今北滿産獸骨の輸出高を見るに左の如くである。

北滿産 獸骨 輸出 高

年次	數量	價	格	百斤當單價
大正八年	一、四八九、三二〇斤	二九、七六六	円	二〇〇
同 九	四八八、三七六	九、七六八		二〇〇
同 十	六五九、二三二	一一、八六六		一八〇
同 十一	一四五、一五二	二二、三二二		一六〇
同 十二	一、七七一、〇六四	二二、二六五		一二〇
同 十三年	三三三、五二八	六〇、三九五		一八〇
同 十四	二五九、七六一	四六、七五七		一八〇
昭和元年	二七九、五三九	四六、九六二		一六八
同 二年	一、八一〇、九五八	二八、〇六九		一五五
同 三年	一、三二四、〇〇七	二二、九〇五		一七五
同 四年	一、三五〇、二一〇	二二、二七八		一六五

備考 一、右は毎年七月一日より翌年六月末日を以つて一年とす。昭和四年度は昭和三年七月一日より昭和四年二月末日迄の分を示す。

二、本統計は滿蒙殖産會社調査に據る。

次に最近四箇年間に於ける東支鐵道主要各驛の發送數量を示せば左の如くである。

東支鐵道主要各驛獸骨發送數量 (單位斤)

驛名	大正十四年	昭和元年	昭和二年	昭和三年
齊爾達	一、四八九三二〇	二九三、五四三	一七五九二六	一八五、五〇六
安達	一、四四、六四九	一八〇、六一四	一一二、五四七	七四、三一七
滿洲	六四、三二三	三六、一一二	六九、八七八	三七、四一七
哈爾濱	一、六三九八三一	一、五四九二八二	一、一二、四七三	九一四、二九五
阿什河	一一五、六五九	二五三、一〇五	一	三七、四七〇
一面坡	五四、九六五	一四二、二九八	七五、二九五	七五、〇五五
滿洲里		一八〇、〇二二	二九、四五六	
札爾諾		三〇、一四八		
海拉爾		六三、三九一	六六、七八九	
三盆河		三二、〇八九	一〇七、五三二	
張家灣		三四、六八五		
布圖哈			三三、五一五	
五站			二七、五三八	
其他	二、五九七、六一六	二、七九五、三八九	一、八一〇、九五八	一、三二四、〇〇七
合計				

備考 一、哈爾濱事務所調査。

二、本表年度は毎年七月一日より翌年六月三十一日に至る一箇年間を謂ふ。

四 獸骨の相場

北滿に於ける獸骨の相場は大體前記三項の單價に示せる如くであるが、最近の相場は次の如くである。

百斤當り金票換算相場

高	值	一圓八十五錢
安	值	一圓六十五錢
平均	均	一圓七十錢

六 哈爾濱に於ける獸骨取扱商

- 滿蒙殖産株式會社出張所
- 服部商店
- 張貴慶(代理店)

第二節 北支那に於ける産額及出廻状況

第一項 天津に於ける産額及出廻状況

一、主要産地及出廻高

獸骨は牛、羊、豚等の肉類を主要副食物として常食する地方に多く産することは前述の如くである。殊に北支那に於て、それが最も著しい關係上、天津は支那第一の集散場である。天津市場に集る獸骨は附近都市に出廻るもの竝に奥地

農村より搬出せるものである。其の搬出區域は自ら民船交通の行はるゝ地方及び鐵道便ある近距離の地方に限らるゝことは滿洲と變りはない。

今天津に出廻る主要産地並に其の推定出廻高を示せば次の如くである。

1. 鐵道便に依るもの

- (イ) 平漢線(舊京漢線)よりの出廻高 (直隸省) 四百五十萬斤
 - 高邑縣、定興縣、定縣、獲鹿縣、清苑縣、新樂縣等。
 - (ロ) 北寧線(舊京奉線)よりの出廻高 (直隸省) 五百五十萬斤
 - 通縣、臨榆縣、豐潤縣、唱黎縣、撫寧縣等。
 - (ハ) 平綏線(舊京綏線)よりの出廻高 (直隸省) 四百五十萬斤
 - 張北縣、萬全縣、宣化縣、綏遠縣、豐鎮縣、大同縣、西包縣等。
 - (ニ) 津浦線よりの出廻高 (山東省) 二百萬斤
 - 濟寧縣、開封縣、蘭封縣、勝縣、滋陽縣、商邱縣、薩縣、鄭縣、德縣等。
 - (ホ) 正太線よりの出廻高 (山西省) 一百五十萬斤
 - 太原縣、榆次縣等。
2. 舟便に依るもの
- (イ) 西河筋により出廻高 二百萬斤
 - 寧晉縣、深澤縣、沙河橋、十字河、衡水、小範等。

(ロ) 御河筋により出廻高

二百五十萬斤

臨清縣、連鎮縣、德州、館陶、安達、泊頭等。

(ハ) 北河筋により出廻高

一百萬斤

揚村、北倉、通縣等。

(ニ) 東河筋により出廻高

六十五萬斤

蘇縣、河頭等。

(ホ) 河南省よりの出廻高

五百四十萬斤

新鄉縣、洛陽縣、大名、道口等。

以上諸地方の出廻高は約三千萬斤にして、之は天津に於ける集散高と見て差支はない。而して之れが出廻状況は季節に依つて稍々差があるが、近時支那の兵亂に依る交通機關破壊の爲め、鐵道便の出廻り不圓滑となり、僅かに舟便に依つて天津市場に出廻りつゝある状態である。

二、出 廻 時 期

當地に於ける獸骨の出廻期は九、十、十一月迄には相當の出廻高があるが、十二、一、二月は舟便に依るものは河川の結氷により出廻皆無に近く、三、四、五月の三箇月間は最も旺盛期に屬し、六、七月は農繁期に加へて河水の減少に伴ふ民船交通の不圓滑により、又八月は雨期にて河水氾濫を伴ふ爲め出廻りは何れも減退するのが普通である。

三、輸 送 状 況

天津に集散せらるゝ獸骨の輸送機關としては主として水運、鐵道、荷馬車等である、以下之等各輸送機關に就き略説

することとする。

1. 水 運

北支那に於て日下獸骨輸送に利用されてゐる河川は西河、御河、北河、東河等が主なるものである。水運に依る輸送は經費頗る少なる爲一般の貨物にあつては旺んに利用されてゐるが、北支那に於ける之等各河川は十一月中旬以降翌年三月頃までは何れも凍結して航行不可能で、然も獸骨の輸送盛期も専ら其の期間なる爲、實際に於て獸骨が水運の便をかることは、出廻り數量から參酌して比較的少いのであるが、前記各河川は春、秋二季間に於て相當利用されてゐる様である。(出廻數量は前記参照)

2. 鐵 道

輸送機關の主たるものは何と云つても鐵道である。近時天津を中心とする鐵道としては平漢鐵道、北寧鐵道、平綏鐵道、津浦鐵道、正太鐵道等であるが、打續く支那國內戰爭の爲め、屢々鐵路を破壊され、或は軍團の徵發する處となり、爲めに貨物輸送上に支障を來すことは特産出廻上に取つ甚だ遺憾であると云はねばならぬ。今此等各鐵道に就き獸骨の輸送状況を觀察することとする。

(イ) 北寧鐵道に依る獸骨の輸送

北寧鐵道(舊京奉鐵道)は歐亞交通上の中樞を占めてゐて、支那四百餘州より滿洲及西比利亞に陸路來往するには皆此線に依らなければならぬ。北は奉天にて我が滿鐵線に接続し、南は天津を経て北平に至り、平綏、平漢、兩鐵道に聯絡し、天津に於て、更に津浦鐵道に聯絡する東亞交通の一大機關である。沿線地方は最も開拓された地方で、人口も亦稠密で獸肉の需要も多い關係上獸骨の生産も相當の額に昇つてゐる。北寧鐵道に於ける獸骨の輸送數

量は調査困難なる事情の爲め茲に掲ぐることは出来ないが、昭和四年度に於いて各地に到着せる數量より大體を推察すれば左の如くである。

北寧線により營口に到着せるもの	四二七・七 ^{米噸}
同 奉天に到着せるもの	二八一・〇
同 天津に到着せるもの	三六三七・五
合 計	四三四六・二

(ロ) 平漢鐵道による獸骨の輸送

平漢鐵道(舊京漢鐵道)は支那江北の大幹線にして、江南に於ける幹線と聯絡し以つて支那南北の縦貫線を爲してゐる。即ち北は北平より發して南は漢口に至る千二百十三軒の鐵道である。此等沿線各背後地は獸肉を主要副食物とするもの多い爲め、獸骨の生産多く従つて其の出廻額も相當の額に達してゐる。而して大體に於て鄭州以北は天津に出廻り、以南は漢口に出廻ると稱されてゐる。今天津商人の推定せる天津、漢口に輸送される昭和四年度の大約數量を掲ぐれば左の如くである。

平漢線により天津に輸送されたるもの	二、九七六・二 ^{米噸}
同 漢口に輸送されたるもの	三、三〇六・八
合 計	六、二八三・〇

(ハ) 平綏鐵道に依る獸骨の輸送

平綏鐵道(舊京綏鐵道)は北平、綏遠間四百三十五哩の鐵道して、門頭溝、宜化、大同、綏包等の支線及び環城技

第三章 獸骨の産額及出廻状況

線を有し、此等諸地方より生産されたる獸骨は總て此鐵道に依つて輸送され、北平を経て天津に集散される。輸送數量に關しては適當なる統計資料なき爲め、之を掲ぐることは出来ないが天津商人の調査せる所に基きて同鐵道に依り天津に輸送せられる昭和四年度の推定數量を示せば左の如くである。

平綏鐵道に依り天津に輸送されたるもの

二、九七六・二米噸

(ニ) 津浦鐵道に依る獸骨の輸送

津浦鐵道は天津、浦口間一千十三軒の鐵道にして、兗濟、臨棗の各支線を有する外、濟南に於ては膠濟鐵道に聯絡し、山東、直隸兩省に産する獸骨に取つては最も重要な輸送機關である。今昭和四年度に於ける獸骨の輸送推定高を掲ぐれば左の如くである。

津浦線德州以北天津に輸送されたるもの

一、三二二・七米噸

同 以南臨城以北濟南に輸送されたるもの

一、一二五・〇

合計

二、四四七・七

第二項 青島に於ける産額及び出廻状況

一、主要産地及出廻高

山東省に於ける獸骨の主要産地は、除州、濟寧、大汶口、泰安等の諸地方であるが年約二千五百噸見當にして、天津に比し頗る貧弱である、此の外海州、膠濟鐵路沿線其他マ、バ、ラ、諸地方に産するもの二千噸、德州産のもの五百噸内外で、合計年約五千噸と見れば大過ないやうである。前記の内德州地方に産するもの約二千五百噸見當なるも船運賃の關

係上其大部分は天津に集中せらる。

而して膠濟鐵路沿線に出廻るものは濟南を第一とし青州之に次ぎ、濰縣、博山、高密等更に之に次ぐ状態である。濟南に特に搬出量の多いのは、津浦線德州以南及び泰安以北(濟寧、除州のもの少量)のものが、總て濟南に集散される關係である。之等出廻品は其の一部分濟南の安泰骨粉工廠にて骨粉に加工される外大部分は原骨の儘、青島に搬出され青島に於ても全集散類の五分の三は骨粉に加工され残りの五分の二見當が原骨の儘總て日本内地に仕向けられつゝある状態である。

今膠濟鐵路主要驛發送數量を掲ぐれば左の如くである。

膠濟鐵路主要驛獸骨發送數量

驛名	民國十四年	民國十五年	民國十六年	民國十七年	民國十八年
高密	三三、一〇〇	一四、〇七〇	一八、〇七四	五五、三〇八	七四、〇三〇
濰縣	二五、四、一〇〇	三三、〇〇〇	三三、一〇八	二九、七九〇	二二、〇五九
青州	二五、〇、二〇〇	四六、五、三三五	四五、六、〇九八	二〇、七、七五九	一四、五、一三六
張店	三、八、七〇〇	三〇、五、二一六	三九、三、八八	二二、四、七	一六、〇〇〇
博山	一、八、〇〇〇	一、三、八、一五四	二、六、七、四〇五	一、六、〇、〇〇〇	一、二、六、〇〇〇
濟南	一、三、〇、一、〇〇〇	一、二、九、五、〇〇〇	三、四、五、〇〇〇	六、二、〇、七、三〇	七、二、〇、〇、六
周村	一、〇、〇〇〇	四、五、〇〇〇	六、四、〇〇〇	三、二、〇〇〇	二、二、〇〇〇
其他各驛	一、八、九、五〇〇	三、九、一、〇九	八、三、八、三五八	四、〇、六、九〇四	一、七、四、六九五

第三章 獸骨の産額及出廻状況

第三章 獸骨の産額及出廻状況

計	11,371,700	2,733,744	2,501,133	1,802,073	1,488,552
---	------------	-----------	-----------	-----------	-----------

五〇

備考 膠濟鐵路運輸課調。

右表に據れば最近に至り漸次發送高を減じつゝあるが、之が原因は近時支那の兵亂に依る鐵道不通等の結果にして、主要各驛中特に濟南の激減せる處より見ても直ちに之を知ることが出来る。

二、運賃

現在膠濟鐵道に於て獸骨取扱の等級は左の如くである。

- 一級 扱 最低を五噸扱とする一噸乃至八噸の一車扱
- 二級 扱 最低を十噸扱とする九噸乃至十二噸の一車扱
- 三級 扱 最低を十五噸扱とする十三噸乃至十五噸の一車扱

取扱等級は以上の如くにして別に滿鐵の如く、牙角、細工用、雜骨等品種別に依る等級はない様である。今各級扱に依る各驛より青島埠頭に至る運賃を掲ぐれば次の如し。

膠濟鐵道獸骨運賃表 (一噸當り貨率)

驛名	一級扱	二級扱	三級扱
南	2,318	2,004	1,700
城	1,755	1,500	1,255
女	1,333	1,140	0,950
姑	1,333	1,140	0,950
口	1,333	1,140	0,950
泉	2,318	2,004	1,700
膠	3,950	3,364	3,364
州	3,950	3,364	3,364
東	3,950	3,364	3,364
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330
哥	3,322	2,766	2,330
州	3,322	2,766	2,330
東	3,322	2,766	2,330
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330
哥	3,322	2,766	2,330
州	3,322	2,766	2,330
東	3,322	2,766	2,330
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330
哥	3,322	2,766	2,330
州	3,322	2,766	2,330
東	3,322	2,766	2,330
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330
哥	3,322	2,766	2,330
州	3,322	2,766	2,330
東	3,322	2,766	2,330
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330
哥	3,322	2,766	2,330
州	3,322	2,766	2,330
東	3,322	2,766	2,330
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330
哥	3,322	2,766	2,330
州	3,322	2,766	2,330
東	3,322	2,766	2,330
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330
哥	3,322	2,766	2,330
州	3,322	2,766	2,330
東	3,322	2,766	2,330
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330
哥	3,322	2,766	2,330
州	3,322	2,766	2,330
東	3,322	2,766	2,330
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330
哥	3,322	2,766	2,330
州	3,322	2,766	2,330
東	3,322	2,766	2,330
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330
哥	3,322	2,766	2,330
州	3,322	2,766	2,330
東	3,322	2,766	2,330
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330
哥	3,322	2,766	2,330
州	3,322	2,766	2,330
東	3,322	2,766	2,330
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330
哥	3,322	2,766	2,330
州	3,322	2,766	2,330
東	3,322	2,766	2,330
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330
哥	3,322	2,766	2,330
州	3,322	2,766	2,330
東	3,322	2,766	2,330
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330
哥	3,322	2,766	2,330
州	3,322	2,766	2,330
東	3,322	2,766	2,330
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330
哥	3,322	2,766	2,330
州	3,322	2,766	2,330
東	3,322	2,766	2,330
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330
哥	3,322	2,766	2,330
州	3,322	2,766	2,330
東	3,322	2,766	2,330
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330
哥	3,322	2,766	2,330
州	3,322	2,766	2,330
東	3,322	2,766	2,330
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330
哥	3,322	2,766	2,330
州	3,322	2,766	2,330
東	3,322	2,766	2,330
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330
哥	3,322	2,766	2,330
州	3,322	2,766	2,330
東	3,322	2,766	2,330
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330
哥	3,322	2,766	2,330
州	3,322	2,766	2,330
東	3,322	2,766	2,330
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330
哥	3,322	2,766	2,330
州	3,322	2,766	2,330
東	3,322	2,766	2,330
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330
哥	3,322	2,766	2,330
州	3,322	2,766	2,330
東	3,322	2,766	2,330
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330
哥	3,322	2,766	2,330
州	3,322	2,766	2,330
東	3,322	2,766	2,330
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330
哥	3,322	2,766	2,330
州	3,322	2,766	2,330
東	3,322	2,766	2,330
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330
哥	3,322	2,766	2,330
州	3,322	2,766	2,330
東	3,322	2,766	2,330
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330
哥	3,322	2,766	2,330
州	3,322	2,766	2,330
東	3,322	2,766	2,330
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330
哥	3,322	2,766	2,330
州	3,322	2,766	2,330
東	3,322	2,766	2,330
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330
哥	3,322	2,766	2,330
州	3,322	2,766	2,330
東	3,322	2,766	2,330
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330
哥	3,322	2,766	2,330
州	3,322	2,766	2,330
東	3,322	2,766	2,330
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330
哥	3,322	2,766	2,330
州	3,322	2,766	2,330
東	3,322	2,766	2,330
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330
哥	3,322	2,766	2,330
州	3,322	2,766	2,330
東	3,322	2,766	2,330
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330
哥	3,322	2,766	2,330
州	3,322	2,766	2,330
東	3,322	2,766	2,330
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330
哥	3,322	2,766	2,330
州	3,322	2,766	2,330
東	3,322	2,766	2,330
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330
哥	3,322	2,766	2,330
州	3,322	2,766	2,330
東	3,322	2,766	2,330
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330
哥	3,322	2,766	2,330
州	3,322	2,766	2,330
東	3,322	2,766	2,330
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330
哥	3,322	2,766	2,330
州	3,322	2,766	2,330
東	3,322	2,766	2,330
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330
哥	3,322	2,766	2,330
州	3,322	2,766	2,330
東	3,322	2,766	2,330
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330
哥	3,322	2,766	2,330
州	3,322	2,766	2,330
東	3,322	2,766	2,330
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330
哥	3,322	2,766	2,330
州	3,322	2,766	2,330
東	3,322	2,766	2,330
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330
哥	3,322	2,766	2,330
州	3,322	2,766	2,330
東	3,322	2,766	2,330
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330
哥	3,322	2,766	2,330
州	3,322	2,766	2,330
東	3,322	2,766	2,330
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330
哥	3,322	2,766	2,330
州	3,322	2,766	2,330
東	3,322	2,766	2,330
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330
哥	3,322	2,766	2,330
州	3,322	2,766	2,330
東	3,322	2,766	2,330
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330
哥	3,322	2,766	2,330
州	3,322	2,766	2,330
東	3,322	2,766	2,330
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330
哥	3,322	2,766	2,330
州	3,322	2,766	2,330
東	3,322	2,766	2,330
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330
哥	3,322	2,766	2,330
州	3,322	2,766	2,330
東	3,322	2,766	2,330
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330
哥	3,322	2,766	2,330
州	3,322	2,766	2,330
東	3,322	2,766	2,330
莊	3,322	2,766	2,330
李	3,322	2,766	2,330

農産物の如く一時に多数の出廻を見る性質のものではなく、屠殺家畜の副産物に過ぎない關係上、其の買付には多大の努力を必要とするやうである。

第二節 北支那に於ける取引慣習

第一項 天津に於ける取引慣習

天津に於ける獸骨の取扱商は地方客商、天津支那商及び外商の三種に區別されてゐる。

地方客商は奥地にて買集めたる獸骨が相當の數量に達するに及び、天津市場に搬出して賣却するものにして、揚卸費置場料の關係上相場に甚だしき變動なき限り、船積の儘賣却するを普通とする。天津支那商は自己計算及び外商の委託を受けて、天津出廻品を買付ける以外に奥地へ買出しに赴くことがある、委託買付を爲す場合支那商は前貸金を要求する慣例がある。之れが爲め外商は現物の受渡を終るまでの危険を負担することとなる爲め、近來此方法による買付は漸時減少してゐる。外商は前述せる如く支那商より買付ける外、店員を直接奥地へ派遣し、又、天津に於ける水運の要地に買付場を設けて買付を行ふこともある。

天津に於ける買付方法には手附金買付、現金買付及び前貸買付の三種がある。手附金買付は一定の數量及び受渡期日を契約して取引し、現金買付は現物と引換に代金を支拂ふこと他の商品取引と同様で最も安全なる買付方法である。前貸買付は最も有利なる買付方法ではあるが、又、最も危険を含む方法とせられてゐる。即ち相手方の信用の程度に應じて現金を貸渡し豫約せし期日に受渡を爲すが故に、一見手附金買付に類似してゐるが、前貸金額は手附金買付の如く買

付高の一部を前渡するのではなく、尠くとも受渡商品代金の過半、又は全部を前貸するのみならず、受渡後と雖も、買手に於て先見込買付の意志ある時は、前貸金の精算せずして受入れたる商品に對する代價を支拂ひ、前貸金は据置き、次期の買入を契約し取引を繼續するのである。此の方法によつて一箇年中に前貸据置金の五倍乃至十倍に相當する取引を行ふことがある。而して前貸金の金利を計算して時價より五仙乃至十仙の安値の買付得らるゝ慣習にして、之に反する時は前貸金を引取り破談することが出来る。

今茲に前貸買付契約の要點を列記すれば次の如くである。

- (一) 前貸金額、商品受渡期日及び數量を明記すること。
 - (二) 前項に違反したる時の危険を防ぐ爲め、確實なる保證人一名以上を定め、連帶責任を負はしむること。
 - (三) 取引方法即ち庭渡、停車場渡或は河著の何れなるかを明記すること、但し停車場渡は持込費、釐金税、積卸費等を買手持とし、又河著の場合には釐金税並に陸揚費は買手の負擔とする。
 - (四) 受渡商品の代價は受渡當時の代價なるか、豫約値段なるかを明記すること。
- 更に前貸買付の利害得失を列記すれば左の如くである。

一、有利なる點

- (イ) 安價に買付得ること。
- (ロ) 一定期に豫想外の數量を集め得ること。
- (ハ) 永続的取引なるを以つて相互に親密の度加はり、取引圓滑は行はれ商機を逸せざること。
- (ニ) 市況に従ひ買入れ得る爲め、相場變動に依る損失を軽減し得ること。

- (ホ) 一般に優良品を集め得られること。
- 二、不利なる點
- (イ) 貸倒れの危険あること。
- (ロ) 買入を見送れざること。

以上三種の買付方法の外に買手側より賣手側の便宜を計つて荷造用麻袋を前貸し、前貸せる麻袋は受渡と同時に回収するものもある。

獸骨の取引は百斤兩建にして、現金拂は八、九掛とするを普通としてゐる。尙ほ受渡には普通土篩を行ふ。獸骨の荷造は汽車積にされるものは古麻袋九十斤入とし、民船によるものはバラ積である。

第二項 青島に於ける取引慣習

青島に於ける、獸骨賣買は多く現金取引であるが、若し大量を要する場合には上市期節なる九、十月に豫約金を交附し、同時に麻袋を給與しなければならぬ慣習となつてゐる。其の賣買値段は二種に分けられてゐる、一は豫約成立と同時に價格を定むるものにして、一は貨物受渡の際市中相場により價格を定むるものである。濟南方面或は膠濟鐵道沿線より青島へ運搬する獸骨の仲買手数料は七十斤内外のもの一袋に付銀二分位である、運賃に就ては別項膠濟鐵道運賃率に於て詳細述べてあるから此處は略すとして、積込料一車に付(十五噸三百二十五袋)一元五角、積卸料及埠頭迄の運賃六元を要すると云ふ。

以前は濟南に來集する獸骨は先づ天津に輸送され、更に日本内地に輸出せられしも青島戦後は商況一變し現今は總て青島に輸送さるゝに至つた。

第五章 獸骨の品質及用途

第一節 品質

獸骨の品質は其の用途に従つて、各々其の標準を異にするけれども、何れも乾燥の程度及び粗骨及び細骨の割合如何が問題にして、乾燥の程度は其の重量に著しい相違がある、其の不十分なるものは冬季結氷するを以つて一見乾燥せる如く見えるが多量の目減りを生ずることがあり、又屢々重量増加の目的を以つて、骨髓等に土砂を混入せることあるを以つて、此點に甚だ注意を拂はなければならぬ。要するに品質の良不良は骨中に不純物を含めるや否やの問題である。何れも家畜の種別を論ずることなく牛骨同様に取扱はれてゐる。

今獸骨取扱上品質に就て注意を要する點を掲ぐれば次の如くである。

- (一) 老骨は風雨に曝され油脂及び光澤を失ひ肥料としても效力少なく、又細工用としても脆く美觀を缺ぐを以つて、新骨を選ぶを要する。骨を地上に投げて直ちに破損せず音響に餘韻あるは新骨である。
- (二) 土砂の混入は斤量に關する處大なれば、之に注意するを要する。
- (三) 骨油を搾取せるものは品質劣等である。
- (四) 大骨多く細骨少きを上とし、之に反するものを下とする。
- (五) 冬季には附著せる水分凍結して重量を増すのみならず、船積に際して水分流出して磷酸分を抽出することがある。

以上は獸骨を一般的に見たもので、更に産地により品質に差あることは云ふ迄もない。即ち滿蒙産及び山東、河南兩省産は牛馬骨多く品質良好なるも、山東省臨清縣産は骨油を搾取せる爲め最も粗悪であると云はれてゐたが近時は比較的良好になつた。又直隸北部、山西、陝西産のものは雜骨多く、殊に細骨を多分に含んでゐる爲め缺斤を生じ易い上に黒土が附著し、色は赤味を帯び品質極めて劣等で價格も亦低廉である。

第二節 用途

獸骨の用途は種々あるけれども、現在は化學の進歩に伴ひ細工骨の外は、先づ膠其他化學製品を得たる後、骨炭或は骨粉として使用せられて居る。骨炭は砂糖の精製用として缺くべからざるものにして、骨粉は磷酸肥料とし、又蹄角粉は窒素肥料として農家に費用せられてゐる。尙ほ細工骨として用ひられてゐるものは腿骨に限られてゐるが、一頭より僅かに三斤乃至四斤を採り得るに過ぎない爲、其の數量は問題にするに足らぬ程僅少である。

第六章 骨粉工業

第一節 總説

全世界に於て骨が初めて肥料として使用されたのは一七七二年にして、其の最初の使用國は日本であると謂はれてゐる。英國は二年遅れて一七七四年に初めて使用せられたと云ふも、何れを最初の使用國とするか判然とした歴史はない。而して英國に於て骨の利用が完全に行はれたのは十九世紀の初めで、骨粉製造が行はるゝに至つた後の事である。英國は十九世紀の初めにヨークシャーに骨粉製造所を創立して盛んに其の原料を外國に求め、一八一五年には其の輸入數量は三萬噸に達したと云ふ。當時獨逸の碩學リービツヒなる人は之を左の如く評してゐる。

英國は骨に對して熱心なる餘り、ライプツヒ、ウォータロー、クリミヤの古戰場及シシリ古墳墓より人骨を搬出して、人骨粉の製造を行ひ、年々他國の海岸より得る骨の量は約三百二十萬人に相當してゐる。實に英國は歐洲全世界の咽喉を扼し其の心臓血液を吸収する吸血鬼であると。

我が國に於て骨粉工業なるものが起つたのは今より約七十年前天保年間で、其以前迄は自家用肥料に骨を粉砕して使用したるに過ぎなかつた。

滿洲及び北支那に於いて骨粉工業の起つたのは極めて晩近のことにして、大正大正八、九年前後である。

今農學博士川瀬惣次郎氏著、肥料學一五三頁以下骨肥類に據つて骨粉肥料に關する事項を説明することとする。

骨の成分は動物の種類、年齢、部分等に依つて異つてゐる。今獸骨の平均成分を示せば左の如くである。

水分	六・七%
有機物	四〇・〇%
脂肪	一四・六%
骨素	二五・四%……一八%以上の窒素を含有す。
磷酸	二二・三%
石灰	二九・二%
苦土、弗素等	一・八%
内磷酸三石灰	四八・七%
五分	五三・三%

右の如く骨の主成分は灰分即ち無機鹽よりなる外に四〇%内外の有機物がある。骨を焼くときは無機質を得べく、又骨を稀酸にて煮沸すれば無機分は去り後には有機物を得らるゝ、骨中の有機物と無機物との割合は動物の種類、年齢、部分等に依つて異つて居り、幼動物の骨は老成動物の骨よりも有機物多く、堅實なる骨は多孔質の骨よりも無機物が多し。骨の中、大腿骨は最も無機質に富んでゐるが、一般に堅硬なる骨は無機物に富んでゐる。

骨の有機成分は主として骨素又はオセインよりなり、少量の脂肪を有してゐる。骨素は其の中にコラーゲンなる擬蛋白質を含み、水と共に長く熱れば膠素即ちゼラチンとなる。骨素は其の中に一八%以上の窒素を含有して居り、骨中には二五乃至三〇%の骨素が存在してゐる。

骨の無機成分は主として磷酸三石灰よりなり、外に炭酸石灰及び少量の磷酸苦土及び弗化石灰が存在してゐる。純粹の骨の中には四%内外の窒素と二九%内外の磷酸が存在し、又六%乃至一五%の脂肪が存在してゐる。此の脂肪は肥効なきのみならず、却つて分解を遅くし有害である。故に骨を肥料とするに當つては骨を水中にて煮沸して脂肪を去ることが必要である。此脂肪は分取して石鹼製造の原料と爲し、脱脂したる骨は日光にて乾かし粉碎して肥料とする。

のである。

骨粉肥料には製法の如何に依つて種々の別がある、次に川瀬氏の肥料學に據り骨粉の種類及製法に就き分説することとする。

第二節 骨粉の種類

第一項 粗骨粒

骨を細かく粉碎したるもので、粒の大きさは米粒乃至豆粒位のものである。之は手間肥であつて販賣肥料ではない。骨は中々粉碎し難いもので碎骨機を有しない農家が之を碎く時は斯る粗粒が得らるゝのである。一般に骨粉肥料類の肥効は粒の徑小なるもの程効果が大きいのであるから粗骨粒の如きは効能の遅い事は免れないけれ共、茶、桑、果實の如き効能除々にして永續的に肥効あるを望む作物には適當の肥料である。

第二項 粗骨粉

前項の粗骨粉よりも一層細かく粉碎したものである。之を製造するには生骨を斧で粉碎し、大釜に入れて水と共に數時間煮沸し、浸出して脂肪を去つて後日光にて適當に乾燥し、碎骨機にて粉碎するのである。

碎骨機の簡單なものは臼と杵とで造られ、それを水力を用ひて動かすのである。大規模の所では蒸氣力又は電力を使用してゐる。臼は石で造つたもので其の底は數枚の帶鐵を裝置し、鐵板は厚さ五分、長さ七、八寸のものを縦に七、八

枚並べ、各板の距離は三分位で骨の粉末が其の隙間より下に落ちる様に出来てゐる。而して臼の下方には篩を備付け粉砕されたる骨粉を更に篩別するのである。杵の先端にも鉄板を施し、骨粉の飛散を防ぐ爲め石臼の上にも適當の装置を用ゐ、其の中央に孔を設け丁度杵が其の孔を上下する仕掛けになつてゐる。

以上は簡單なる碎骨機の説明であるが、若し碎骨機なき場合の骨粉の製造方法は、生骨を割つて骨片となし、醱酵せしめて脆くしたる後人力を以つて粉砕するのである。骨を醱酵さす方法は農家の便宜に従ひ、骨と厩肥、堆肥、木灰其の他適宜の材料と混合し、其の上に土を被ひ數箇月間醱酵せしむるのである。此の方法は長時間を要するけれども、勞力を略き肥効は頗る速かである。醱酵の際アンモニヤの揮發を起して、窒素の損失を招くとの惧を抱く人があるが、之は上部に土を掩ふてある爲めその惧は無用である。而して木灰を混すれば、其のアルカリ性の爲めにアンモニヤの揮發を促す憂れがあるけれども、アルカリは骨中の脂肪に作用して之を鹼化し去る爲め、骨を粉砕し易くする。又醱酵の際種々の有機酸を生じ、此等のものはアルカリを中和するを以つて、アルカリ性によるアンモニヤの揮發は少しと云ひ得る。

粗骨粉の成分は製法に依つて異なるが、大略次の如くである。

脂 肪	一〇——一五%
窒 素	三・七——五・〇%
磷 酸	一六——二〇%

第三項 蒸 製 骨 粉

骨は弾性を有してゐて容易に粉砕し難い。之を細粉とするには蒸氣を通じて加熱するを必要とする。骨を蒸製するには種々の法がある。一般に行はれてゐる方法は、先づ生骨を脂肪に富むものと富まないものとに分け、脂肪の多いものは荒く粉砕して粗骨片とし、大釜の中に入れて水と共に煮沸して脂肪を去り、後に之を乾燥して、前に分けて置いた脂肪分の少い骨と混じて細かく碎き、之を加壓蒸氣釜に入れ、二—四氣壓の壓力を加へ二四時間蒸熱すれば骨中の脂肪は除かれ、骨質脆弱となる。けれども、此の際骨素はゼラチン(膠素)に變化するので實際上四氣壓以上の壓力を加ふる時は膠を分離し窒素の損失を生ずる虞れがある。此の骨素は骨中の窒素の主成分なるのみならず、骨の腐敗の際に有機酸を生じ磷酸を生じ磷酸分の分解を容易ならしむるものであるが故に、高壓を用ひて骨中の骨素を悉く膠として分離せしむることは大いに不利である。故に骨粉製造が目的ならば蒸氣の壓力は二氣壓位に止め、又膠製造が目的なれば四氣壓以上の壓力を使用せねばならぬ。

今各種蒸製骨粉の組成を示せば左の如くである。

種 類	窒 素 %	磷 酸 %	脂 肪 %
通 常 蒸 製 骨 粉	三・〇—四・〇	二二・〇—二四・〇	四
脱 膠 骨 粉	〇・七—一・五	二七・〇—三〇・〇	〇
浸 出 骨 粉	四・八—五・三	二〇・〇—二二・〇	二

前記の内浸出骨粉を製造するには骨を密閉し得る二重底の釜に容れ、周圍に蒸氣を通じて充分乾燥したる後にベンジ

ン或は二硫化炭素を以て脂肪を浸出するのである。脂肪が浸出したる後は直接蒸氣を通じて浸出劑を去り、乾燥したる後之を粉碎する。此の方法に依る時は脂肪は充分に去り其の含量は二%以下とすることが出来る。斯の如くにして製造したる骨粉は品質極めて良好で窒素成分に富むから標準骨粉の名稱が附せられてゐる。

次に蒸製骨粉の肥效に就き述べれば、三種の蒸製骨粉の中最も良好なるものは前述せる浸出骨粉で通常骨粉が之に亞ぎ脱膠骨粉が最も劣等である。

土壤中に於ける骨粉の分解の難易は骨粒の精粗と大なる關係がある。故に蒸製骨粉に比較して良く作物に利用せられてゐる。又土壤の性質にも關係あることは勿論である、重粘に過ぐる土壤には分解すること遅く、有機物に富める土壤には分解し易い。又、氣候にも關係があつて、氣候寒冷なる地方に骨粉を速效ならしめんとするには腐敗醱酵せしむることを必要とするが、日本内地は氣候温暖であるから北日本を除いては其の必要はないのである。

骨粉は米、麥、蕪菁、煙草等に用ひて效果がある又た桑、茶の如き生長期の長い作物に對しては最も適當なる肥料である、是れは骨粉が漸效性肥料であるからである。

骨粉は餘り速效でないから之が使用法は、先づ基肥として成るべく早く土地に施し、丁度分解に適する深さに之を鋤き入れることが最も良しとされてゐる。而して有機質肥料、硫酸アンモニヤを共用して其の分解を速かにすれば肥效顯著なるものがあると云はれてゐる。又骨粉は石灰質土壤、或は新たに石灰肥料を施したる土地には使用しない方がよい、内地に於ける骨粉の使用量は一反歩に就き五貫乃至十五貫である。

第四項 骨 炭

骨炭は別名獸炭とも稱されてゐる。製糖業に於て砂糖の製精に使用せらるゝものであるが、餘り使用久しきに互るときは脱色力を失ふので廢物は肥料として使用さる。

骨炭を製造するには良質の骨を取り水洗したる後、乾燥シレットの中に入れ乾餾を行ふのである。然るときは炭化する骨を残留するを以つて、之を粉碎し、稀鹽酸にて温浸し、水にて洗滌したる後に乾燥するのである。今その分析例を示せば左の如し。

炭	素	一〇・五%
磷酸石灰及磷酸苦土並に弗化石灰		八〇・二一
炭 酸 石 灰		八・三〇
石 膏		〇・一七
酸 化 鐵		〇・二二
硅 酸		〇・三四
ア ル カ リ 鹽		〇・三五

製糖工場にては骨炭を以つて色素其他の不純物を除去するのである。然し乍ら骨炭の吸引力には限があつて數回使用すれば漸次其の效を失ふに依つて、再び加熱して其の吸引力を回復さすが、斯くの如く兩三回行ふ時は炭素の含有量は漸減して全く吸収力を失ふに至る。依つて之を廢棄物として肥料に使用するのである。

斯くの如く廢棄物となり肥料として拂下げられたる骨炭には種々のものを含有してゐる。即ち三二%乃至三六%の磷酸と極めて微量なる窒素を含んでゐる。窒素の含量は一%を越ゆることなしと謂はれてゐる。今其の分析例を示せば左

の如くである。

成分	第一例		第二例	
	炭素	石膏	炭素	石膏
炭素	九・六%	〇・二	九・七%	〇・三
石 膏	八・三	七・八	七・七	七・九
炭酸石灰	七・三	一・三	〇・五	二・五
磷酸三石灰	一・三	〇・五	〇・五	〇・五
磷酸苦土	〇・五	一・五	〇・五	一・五
食 鹽	一・五	二・五	〇・五	一・五
土、砂其他	一・五	二・五	〇・五	一・五

骨炭は肥料價値甚だ少く、其中磷酸も不溶性の磷酸三石灰の形態をなしてゐるので直接肥料とせず、過磷酸石灰製造の原料とするを最も適當としてゐる。尚ほ一〇%内外の炭素を有するを以つて土地改良の効果も存在して居る。

第五項 蒸製蹄角粉

角は器具及細工物に使用し、其削屑を肥料に用ひて居る。蹄は殆ど紅工物には用ひられず總て肥料として使用さる。獸角の成分は窒素一〇%乃至一三%、磷酸六%乃至一〇%を含有して居る、蹄中には一四%乃至一五%の窒素が存在する。蹄及び角は其の儘にしては分解し難く、且つ又粉碎し難きを以つて、蒸製して其の質を變じてから乾燥粉碎して蹄粉及角粉とするのである。蒸熱すれば粉碎し易くなるのみならず肥效速かとなる。通常は混合して蹄角粉となし市場に販

賣してゐる。蹄角粉混合成分は七%乃至一五%平均一二%内外の窒素を含むので窒素肥料として農家に使用されてゐる。

蹄角粉は遲效性窒素肥料にして、之を使用するには腐敗して用ふるか、又は調合肥料の原料として使用するのが適當である。

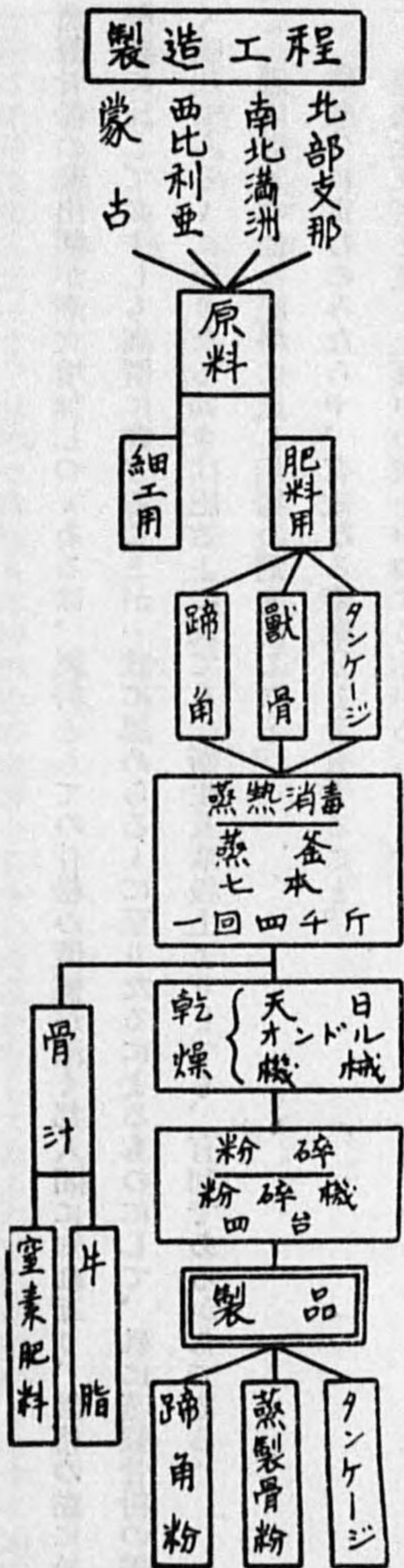
第三節 滿洲に於ける骨粉工業

第一項 概 説

蒸製骨粉の輸出額が漸次増加しつゝあるは、肥料としての骨粉の價値が漸く邦人間に知れ互り、價格の點に於ても他の肥料に比して必ずしも高價に非ざることが一般に認めらるゝに至りたるものにして、殊に蒸製骨粉の需要が著しく喚起せらるゝに至りたる如きは肥效上に就ても、衛生及取扱上よりしても、有利であるからである。

- (一) 過磷酸其の他の肥料に比し相場の割安なること。
- (二) 磷酸分に富むのみならず、有效なる窒素分を含有すること。
- (三) 鹽基性反應を呈し土壤中の酸を中和する作用あること。
- (四) 不溶性なるが故に雨水の爲流出せざること。
- (五) 他肥料と混用することに依り悪作用を呈せざること。
- (六) 使用容易にして危險性少きこと。

等の特長に依つて販路は次第に擴められつゝある。
 而して之等蒸製骨粉の製造法は何れの工場に於ても同様に於て他工業製品に比し頗る簡單である。今大連滿蒙殖産會社に於ける製造工程を掲ぐれば左の如くである。



滿洲各地に出廻る獸骨の半數以上は大連滿蒙殖産會社骨粉工場に於て蒸製骨粉に加工され、殘餘は原骨の儘日本内地に仕向けられつゝある。以下滿蒙殖産會社骨粉工場に就き略説せん。

第二項 滿蒙殖産株式會社骨粉工場

滿蒙殖産株式會社骨粉工場は滿洲唯一の骨粉工場にして、大正九年三月、資本金二百萬圓を以つて大連市向陽臺に設立せられ、漸次發展し現在にては天津、奉天、鹿兒島に分工場を有し、尙ほ奉天、天津、遼陽、哈爾濱、鹿兒島、長春安東、營口等獸骨の主要集散地には各支店及出張所を設け原料骨の蒐集を行つてゐる。同工場の製肥部一箇年製造能力

は二萬五千英噸と稱せられ、其の賣上額は毎年平均二百萬圓内外と謂はれてゐる。工場従事員は日本人三十名、支那人約四百名にして、製品種目は左の如くである。

- (一) 製肥部 蒸製骨粉、生骨粉、蹄角粉、其他
- (二) 製革部 各種皮革……之は専ら奉天工場に於て製造されてゐる。
- (三) 製膠部 各種膠

然して同工場に於ける原料骨使用高を掲ぐれば左の如くである。

滿蒙殖産骨粉工場原料骨仕入高 (單位米噸)

月次	年次	
	大正十三年—同十四年	大正十四年—昭和元年
七月	三四・二	三二〇七
八月	二〇四・七	二七二・六
九月	四三・七	四六二・一
十月	七六〇・七	四六五・二
十一月	五七八・六	七九九・一
十二月	四三〇・五	四六五・五
一月	一〇六五・七	五二八・六
二月	五一〇・九	六六三・二
三月	一一二七・八	七三〇・四
昭和元年—同二年		
七月	二六五・五	三三三・五
八月	四六四・五	一七五・五
九月	四七七・〇	五〇七・六
十月	六一四・〇	五七八・二
十一月	六二七・五	五二九・六
十二月	五七五・五	五六七・一
一月	六三五・八	四七四・二
二月	三七七・六	五七七・四
三月	五九〇・八	一一七九・四
昭和二年—同三年		
七月	三七一・五	三七一・五
八月	二七二・九	二七二・九
九月	四九六・〇	四九六・〇
十月	七二九・三	七二九・三
十一月	七三九・〇	七三九・〇
十二月	一〇二〇・五	一〇二〇・五
一月	一四二二・七	一四二二・七
二月	一三三八・一	一三三八・一
三月	一四二二・三	一四二二・三

第六章 骨粉工業

月	四	五	六	合計
六月	六八四・〇	四六三・〇	五二二・七	七一〇五・五
七月	八九六・五	一一〇九・一	九九〇・三	七七九三・九
八月	八五五・六	六一七・七	三三三・一	六四三三・六
九月	一一〇六・三	七六八・八	六九八・八	七五七五・四
十月	一、五九八・三	八〇九・八	四八五・八	一〇、五一四・四

七〇

備考 同社の合計年度は七月より翌年六月迄である。

今同工場に於ける製造肥料の肥効成分を示せば左の如くである。(滿鐵中央試験所分析)

一、蒸製骨粉	含有成分	磷酸	二二・〇〇%	窒素	四・〇〇%
二、生骨粉	含有成分	磷酸	二〇・〇〇%	窒素	四・二〇%
三、蹄角粉	含有成分	窒素	一三・〇〇%	磷酸	一・〇〇%

第四節 北支那に於ける骨粉工業

第一項 天津に於ける骨粉工業

一、概説

天津に出廻る約三千萬斤の獸骨中約二割は原骨の儘鹿兒島に仕向けられ、殘餘の骨は天津に於て蒸製骨粉の原料に消費されてゐる。

骨粉の製造法は何れの工場に於ても同様にして先づ原料骨を蒸釜中に入れ約一時間蒸氣にて蒸し柔軟になりたるものを十分に乾燥し、其の質脆弱となりたるものを、粉碎機にかけ、更に篩に掛けて細粉を採るのである。尙ほ天津各工場に於ける獸骨仕入値段を見るに左の如くである。

天津各工場獸骨仕入値段 (百斤に付)

月	昭和二年		昭和三年		昭和四年	
	次	年	次	年	次	年
一月	二八二	二八〇	二二〇	二二四・五	二七〇	二七〇
二月	二八六	二八五	三三〇	二八〇	二七〇	二七〇
三月	二八五	二七五	二六〇	二八〇	二八〇	二八〇
四月	二七〇	二七〇	二六〇	二八〇	二八〇	二八〇
五月	二七〇	二七〇	二七〇	二四〇	二四〇	二四〇
六月	二七〇	二七〇	二七〇	二四〇	二四〇	二四〇
七月	二七〇	二七〇	二七〇	二四〇	二四〇	二四〇
八月	二七〇	二七〇	二七〇	二四〇	二四〇	二四〇
九月	二七〇	二七〇	二七〇	二四〇	二四〇	二四〇
十月	二七〇	二七〇	二七〇	二四〇	二四〇	二四〇

十	十	二・三〇	二・六五	二・八〇
二	一	二・三〇	二・五〇	三・〇〇
月	月			

備考 一、天津清喜洋行調査

二、右値段は工場仕入の獸骨の相場で輸出獸骨の相場ではない。

天津に於ける骨粉工業は邦人の獨占的のもので外國人の經營に係る工場は皆無である。即ち清算洋行工場、武齊工場、内外肥料會社工場(滿蒙殖産會社經營)が目下盛んに繰業しつつある。今順次之等工場に付き略説することとする。

二、武齊洋行骨粉工場

武齊洋行骨粉工場は一九〇一年に資本金二十五萬元を以つて設立せられたもので、工場所在地は天津市外小劉莊に在り、従事員は日本人四名、支那人百名を使用してゐる。一箇年の生産能力は一萬噸と稱せられてゐる。主として蒸製骨粉、生骨粉、蹄角粉等の製造及び獸骨の輸出を取扱つてゐる。同工場製造骨粉にして最近輸出されたる數量(元來骨粉は内地の需要に應じて製造しつゝあれば輸出數量が大體に於て製造高と見做してよい。以下同じ)及び原料骨使用高を掲ぐれば次の如くである。

年次	骨粉	原料骨使用高
昭和二年	上半期	三、七九五
	下半期	一、一八一
昭和三年	上半期	四、二三五
	下半期	八九五

年次	骨粉	原料骨使用高
昭和四年	上半期	六、一三一
	下半期	二、二七四

三、内外化學肥料公司骨粉工場

工場の所在地は天津市外大直沽にして、一九二三年に創立せられ、資本金五萬圓、職工約六十名を使用し一箇年の生産能力現在に於ては約一萬噸と稱せられてゐる。内外化學骨粉工場の前身に大町骨店で其の後阿部骨店となり現在は大連の滿蒙殖産株式會社が買収して同會社の經營に屬してゐる。今最近に於ける同工場の骨粉輸出高及原料骨使用高を掲ぐれば左の如くである。

年次	骨粉	原料骨使用高
昭和二年	上半期	四、〇二七
	下半期	一、八八〇
昭和三年	上半期	三、一四〇
	下半期	一、五〇〇
昭和四年	上半期	四、〇七一
	下半期	一、九二〇

四、清喜洋行骨粉工場

清喜洋行骨粉工場は、一九一五年に天津市外楊家莊に設立せられ、資本金十萬元の工場である。青島、漢口に各一箇所の支工場を有し、主として蒸製骨粉、生骨粉、蹄角粉等を製造してゐる。天津工場に於ける職工使用數は日本人三名支那人百名で一箇年生産能力は約一萬噸と稱されてゐる。今同工場の骨粉輸出高及原料骨使用高最近三ヶ年間に掲ぐれ

ば左の如くである。

年次	骨粉		原料骨使用高 斤
	昭和二 年	昭和三 年	
昭和二 年	上半期	一、三二〇	二、五〇九、〇〇〇
	下半期	八六〇	
昭和三 年	上半期	三、三二〇	一、六三五、三三〇
	下半期	七二〇	
昭和四 年	上半期	一、六五二	六、二八九、〇〇〇
	下半期	三五〇	
昭和五 年	上半期	三、一三四、八〇〇	一、一九二、八〇〇
	下半期	六六五、〇〇〇	

尙ほ同工場製、蒸製骨粉及蹄角粉の肥效成分を掲ぐれば左の如くである。(昭和五年中央試験所分析)

含有成分	一、蒸製骨粉	
	磷酸	窒素
二、蹄角粉	二二・九七%	四・〇三%
含有成分	四・三一%	一一・五四%

第二項 青島に於ける骨粉工業

青島に於ける骨粉製造工場は、二、三年前迄は頗る盛んに蒸製骨粉の製造を爲しつゝあつたが、目下は興亞起業株式會社、高橋商會工場及び濟南の金子商會經營に係る安泰工廠以外は殆んど操業し居らず年々衰微の傾向を辿りつゝある

其原因は主として數度の支那の戦争の爲鐵道破壊、不通等にて奥地獸骨の出廻り不圓滑となり、又近時の如き銀安にては採算上不利なる結果であると思惟さる。今最近の統計不詳に就き參考迄に過去に於ける各工場の生産高を掲げることとする。

青島に於ける工場別骨粉生産高 (單位英噸)

工場名	一九二二年	一九二三年	一九二四年
安泰工廠(濟南)	一、三〇〇	一、三〇〇	三、四〇〇
山東骨粉廠(同)	—	—	一、三〇〇
興亞起業工場(青島)	—	—	七〇〇
鈴木商店工場(同)	一、二〇〇	七〇〇	—
高橋商會工場(同)	六〇〇	五〇〇	五〇〇
出光商會工場(同)	一、〇〇〇	五〇〇	—
中華骨粉廠(同)	五〇〇	—	五、九〇〇
計	四、六〇〇	四〇〇	—

尙ほ目下操業しつゝある骨粉工場に就き略説すれば次の如くである。

一、興亞起業株式會社骨粉工場

資本金七萬圓を以つて、大正十二年十二月より作業に従事し、工場は臺西鎮に在り、一箇年製造能力は四千噸と稱せ

られてゐる、職工数は時期に依り増減するが十三名より三十名位使用しつゝある。

二、高橋商會骨粉工場

大正十五年の創設に係り、資本金五萬圓、工場所在地は臺西鎮にして、一箇年製造能力は一千二百噸内外と謂はれ、職工数は年平均二十人を使用しつゝありと。

三、金子安泰工廠（濟南）

大正十年の設立にして、濟南市外緯七路に工場を有し、資本金七萬圓、一箇年製造能力一千二百噸と稱されてゐる、職工数は二、三十人にして時期に依り五十名位使用することがある。

尙ほ青島に於ける原料骨及び蒸製骨粉の相場を見るに左の如くである。

青島に於ける獸骨及骨粉相場表

（骨粉は一英噸當り
獸骨は一〇〇斤當り）

年次	月次	昭和二年		昭和三年		昭和四年	
		獸骨	粉	獸骨	粉	獸骨	粉
一	月	三・四〇元	八九〇〇	三・一〇元	八三〇〇	三・五〇元	九〇〇〇
二	月	三・三〇	八五〇〇	三・七〇	九四〇〇	三・六〇	九二〇〇
三	月	三・三〇	八七〇〇	三・五〇	九〇〇〇	三・五〇	九〇〇〇
四	月	三・四〇	九〇〇〇	三・九〇	九八〇〇	三・三〇	八四〇〇
五	月	三・二〇	八三〇〇	三・二〇	八四〇〇	二・八〇	七六〇〇
六	月	三・〇〇	八〇〇〇	二・五〇	七〇〇〇	二・七〇	七五〇〇

年次	月次	昭和二年		昭和三年		昭和四年	
		獸骨	粉	獸骨	粉	獸骨	粉
七	月	二・五〇	七〇〇〇	二・八〇	七二〇〇	二・七〇	七四〇〇
八	月	三・〇〇	七〇〇〇	二・八〇	七六〇〇	三・〇〇	八〇〇〇
九	月	三・〇〇	八〇〇〇	三・〇〇	八〇〇〇	三・五〇	八五〇〇
十	月	三・二〇	七七〇〇	三・一〇	八四〇〇	三・四〇	八八〇〇
十一	月	三・〇〇	七五〇〇	三・四〇	八八〇〇	三・三〇	八六〇〇
十二	月	三・一〇	七七〇〇	三・四〇	八八〇〇	三・四〇	九二〇〇

第七章 獸骨及骨粉の輸出状況

第一節 總 說

獸骨及骨粉の輸出は全支那中天津を以つて第一とし、大連之に亞ぎ、漢口、上海、青島更に之に亞いである。上海に出廻る獸骨は主として蘇州、常州、鎮江、蕪湖及上海附近に産するものにして年々日本に輸出せらるゝもの十萬擔内外、價格約十五萬海關兩と稱せられ、漢口に集る獸骨は主として湖北、湖南、河南省産のものにして輸出年額は約十五萬擔内外、價格十七、八萬海關兩と見て大過ない様である。山東省産の獸骨は品質良好の定評あり直隸省境に近きものは水運に依つて天津に出廻り、西南部地方のものは青島に集る。而して四五年前までは年額約十萬擔の輸出を見て居たが近時は減少して約五、六萬擔である。今表に示して之等主要各港の獸骨(骨粉を含む)輸出高を掲ぐれば左の如くである。

支那主要港獸骨(骨粉を含む)輸出高 (單位擔、海關兩)

年次	一九一九年	一九二〇年	一九二一年	一九二二年	一九二三年	一九二四年	一九二五年	一九二六年	一九二七年	一九二八年
天津	四七、七六六	五〇、〇七六	六四、三六六	四九、八六六	九五、一五三	六四、〇四四	七五、二五五	八六、九六六	一三二、一七六	一三六、七五九
漢口	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇
上海	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇
青島	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇
合計	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇

年次	一九一九年	一九二〇年	一九二一年	一九二二年	一九二三年	一九二四年	一九二五年	一九二六年	一九二七年	一九二八年
青島	七、七六六	九、二五三	八、四四〇	八、五八三	一〇、一九〇	一〇、一九〇	七、七六一	八、三二二	一〇、一〇〇	一〇、一〇〇
漢口	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇
上海	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇
其他各港	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇
合計	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇

備考 一、北支那貿易年報及海關統計に依る
 二、漢口港一九二五年以降輸出数量激減せるは同港海關に於て獸骨及骨粉を肥料の部に繰換せし爲で表に掲げたる數量は主として細工用の獸骨と推察する。

又之等各港より何れの國へ仕向けらるゝかを見るに次の如くである。

支那各港より仕向地別獸骨(骨粉を含む)輸出高 (單位擔、海關兩)

年次	一九一九年	一九二〇年	一九二一年	一九二二年	一九二三年	一九二四年	一九二五年	一九二六年	一九二七年	一九二八年
香港	一、二五三	一、二五三	一、二五三	一、二五三	一、二五三	一、二五三	一、二五三	一、二五三	一、二五三	一、二五三
其他各港	一、二五三	一、二五三	一、二五三	一、二五三	一、二五三	一、二五三	一、二五三	一、二五三	一、二五三	一、二五三
合計	一、二五三	一、二五三	一、二五三	一、二五三	一、二五三	一、二五三	一、二五三	一、二五三	一、二五三	一、二五三

第七章 獸骨及骨粉の輸出状況

年次	数量	金額
大正十四年	201,910	341,167
昭和元年	221,700	417,333
昭和二年	220,229	430,637
昭和三年	233,947	507,491
昭和四年	211,700	412,290
昭和五年	221,700	391,067
昭和六年	221,700	391,067
昭和七年	221,700	391,067
昭和八年	221,700	391,067
昭和九年	221,700	391,067
昭和十年	221,700	391,067
昭和十一年	221,700	391,067
昭和十二年	221,700	391,067
昭和十三年	221,700	391,067
昭和十四年	221,700	391,067
昭和十五年	221,700	391,067
昭和十六年	221,700	391,067
昭和十七年	221,700	391,067
昭和十八年	221,700	391,067
昭和十九年	221,700	391,067
昭和二十年	221,700	391,067
昭和二十一年	221,700	391,067
昭和二十二年	221,700	391,067
昭和二十三年	221,700	391,067
昭和二十四年	221,700	391,067
昭和二十五年	221,700	391,067
昭和二十六年	221,700	391,067
昭和二十七年	221,700	391,067
昭和二十八年	221,700	391,067
昭和二十九年	221,700	391,067
昭和三十年	221,700	391,067
昭和三十一年	221,700	391,067
昭和三十二年	221,700	391,067
昭和三十三年	221,700	391,067
昭和三十四年	221,700	391,067
昭和三十五年	221,700	391,067
昭和三十六年	221,700	391,067
昭和三十七年	221,700	391,067
昭和三十八年	221,700	391,067
昭和三十九年	221,700	391,067
昭和四十年	221,700	391,067
昭和四十一年	221,700	391,067
昭和四十二年	221,700	391,067
昭和四十三年	221,700	391,067
昭和四十四年	221,700	391,067
昭和四十五年	221,700	391,067
昭和四十六年	221,700	391,067
昭和四十七年	221,700	391,067
昭和四十八年	221,700	391,067
昭和四十九年	221,700	391,067
昭和五十年	221,700	391,067
昭和五十一年	221,700	391,067
昭和五十二年	221,700	391,067
昭和五十三年	221,700	391,067
昭和五十四年	221,700	391,067
昭和五十五年	221,700	391,067
昭和五十六年	221,700	391,067
昭和五十七年	221,700	391,067
昭和五十八年	221,700	391,067
昭和五十九年	221,700	391,067
昭和六十年	221,700	391,067
昭和六十一年	221,700	391,067
昭和六十二年	221,700	391,067
昭和六十三年	221,700	391,067
昭和六十四年	221,700	391,067
昭和六十五年	221,700	391,067
昭和六十六年	221,700	391,067
昭和六十七年	221,700	391,067
昭和六十八年	221,700	391,067
昭和六十九年	221,700	391,067
昭和七十年	221,700	391,067
昭和七十一年	221,700	391,067
昭和七十二年	221,700	391,067
昭和七十三年	221,700	391,067
昭和七十四年	221,700	391,067
昭和七十五年	221,700	391,067
昭和七十六年	221,700	391,067
昭和七十七年	221,700	391,067
昭和七十八年	221,700	391,067
昭和七十九年	221,700	391,067
昭和八十年	221,700	391,067
昭和八十一年	221,700	391,067
昭和八十二年	221,700	391,067
昭和八十三年	221,700	391,067
昭和八十四年	221,700	391,067
昭和八十五年	221,700	391,067
昭和八十六年	221,700	391,067
昭和八十七年	221,700	391,067
昭和八十八年	221,700	391,067
昭和八十九年	221,700	391,067
昭和九十年	221,700	391,067
昭和九十一年	221,700	391,067
昭和九十二年	221,700	391,067
昭和九十三年	221,700	391,067
昭和九十四年	221,700	391,067
昭和九十五年	221,700	391,067
昭和九十六年	221,700	391,067
昭和九十七年	221,700	391,067
昭和九十八年	221,700	391,067
昭和九十九年	221,700	391,067
昭和一百年	221,700	391,067

備考 北支那貿易年報に依る。

尚ほ最近五箇年間大連港の月別輸出高を示せば左の如くである。

大連港獸骨及骨粉輸出數量月別表 (單位擔)

月次	大正十四年	昭和元年	昭和二年	昭和三年	昭和四年
一月	23,255	27,133	26,799	28,432	38,050
二月	5,196	11,249	13,451	25,784	18,572
三月	16,159	27,161	34,101	40,121	17,747
四月	4,171	24,772	19,730	39,024	46,386
五月	25,716	23,339	38,986	24,164	20,148
六月	20,985	35,833	33,570	19,270	16,398
七月	4,639	11,137	8,065	3,058	5,805
八月	6,100	6,529	1	7	2,108
九月	18,679	3,390	3,712	3,499	5,910

月次	数量	金額
十月	11,005	17,753
十一月	23,825	9,393
十二月	15,580	20,045
計	110,190	217,133

備考 海關統計月報に依る。

第三節 天津港輸出状況

全支那各港中其の輸出數量に於て天津港が第一位を占むることは既述の如くであるが、今各種統計を掲げて其の一般を窺へば次の如くである。

天津港獸骨(骨粉を含む)輸出高累年表 (單位擔、海關兩)

年次	数量	金額
一九一九年	338,364	477,628
一九二〇年	255,636	391,067
一九二一年	373,924	644,338
一九二二年	251,772	498,865
一九二三年	358,288	951,552
一九二四年	272,555	640,404
一九二五年	300,433	752,293
一九二六年	275,597	896,886
一九二七年	288,989	1,131,776
一九二八年	304,534	1,267,559

備考 北支那貿易年報。

第七章 獸骨及骨粉の輸出状況

第七章 獸骨及骨粉の輸出状況

尙ほ天津商業會議所調査に依る獸骨、骨粉別輸出高を示せば左の如くである。

天津港獸骨、骨粉別輸出高

年次	獸骨		骨粉		合計
	數量	斤換算	數量	斤換算	
一九二四年	九六、五〇八	一六、二三三、三四四	二、〇五四	二〇、四七四	三六、六二〇、七六六
一九二五年	一七〇、〇五二	二八、五六八、七三六	一〇、七二四	一八、二三八、〇二二	四六、七〇七、五三八
一九二六年	八五、八三八	一四、四二〇、七八四	一一、七一	一九、八〇九、七九三	三四、三〇〇、五七七
一九二七年	五九、八一七	一〇、四九、三五六	一三、七二〇	一三、三七九、六〇〇	三三、一七九、二二六
一九二八年	五三、六九五	九、〇二〇、七六〇	一三、七九〇	一三、三四六、四七〇	三三、三六七、一三〇
一九二九年	三四、九二二	五、八六六、七二八	一六、三〇四	二七、六〇二、六七二	三三、四六九、四〇〇

備考 換算率 一袋一六八斤、一英噸一、六九三斤

尙ほ天津港に於ける輸出時期を見る爲同港最近三箇年間に於ける月別輸出高を見るに左の如くである。

天津港獸骨及骨粉輸出月別表

月次	昭和二年(一九二七年)		昭和三年(一九二八年)		昭和四年(一九二九年)	
	獸骨	骨粉	獸骨	骨粉	獸骨	骨粉
一月	二、七三五	七、七五	八、〇五〇	七、三五	二、〇〇〇	一、八九〇
二月	三、〇〇〇	八、七〇	一、	一、七九〇	一、	三、七〇

月次	昭和二年(一九二七年)		昭和三年(一九二八年)		昭和四年(一九二九年)	
	獸骨	骨粉	獸骨	骨粉	獸骨	骨粉
三月	一六、六四〇	二、五六〇	八、四二〇	二、八一五	八、〇三五	四、七六七
四月	一三、九四二	一、六九五	一七、〇〇五	二、七二六	一、五〇〇	一、二七〇
五月	三、〇〇〇	二、二五	五、〇〇	二、七一九	二、七一九	九二
六月	一、	一、	一、	一、	一、	一、
七月	一、	一、	一、	一、	一、	一、
八月	一、	一、	一、	一、	一、	一、
九月	一、	一、	九、二一〇	一、五〇	七、四七二	五〇
十月	七、〇〇〇	七、五一	二、四〇〇	六、四五	二、五四七	二、三九四
十一月	三、五〇〇	二、五八〇	一、七〇〇	二、一〇〇	一、	一、三五四
十二月	五、九八七	一、三〇七	五、三六九五	一、三七九〇	三、四九二	一、六三〇
計	一六、六四〇	三、〇一〇	六、〇〇〇	二、二九五	七、〇五〇	三、四七〇

備考 一袋一六八斤
一英噸一、六九三斤

尙ほ参考迄に天津獸骨及骨粉の内地相場並に對日輸出爲替相場を示せば左の如くである。

天津港鹿兒島沖値段 (百斤に付)

年次	昭和二年	昭和三年	昭和四年
一月	五、〇〇	四、三〇	五、二〇
二月	五、〇〇	四、四〇	五、〇〇

第七章 獸骨及骨粉の輸出状況

第七章 獸骨及骨粉の輸出状況

三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二
月	月	月	月	月	月	月	月	月	月
四・九〇	四・八〇	四・七〇	四・六〇						二一
四・八〇	五・〇〇	四・八〇	四・三〇						
四・八〇	四・六〇	四・二〇	四・二〇	四・二〇	四・二〇	四・二〇	四・二〇	四・二〇	四・二〇

天津蒸製骨粉神戸沖値段 (二英噸に付)

一	二	三	四	五
月	月	月	月	月
九三・〇〇	九五・八〇	九六・〇〇	九六・五〇	九五・〇〇
九一・〇〇	九三・〇〇	九五・〇〇	一〇一・〇〇	九八・〇〇
一〇〇・〇〇	一〇二・〇〇	一〇三・〇〇	一〇五・〇〇	一〇五・〇〇

六	七	八	九	十	十一	十二
月	月	月	月	月	月	月
九五・〇〇						二一
九五・〇〇	九九・〇〇	一〇二・〇〇	一〇一・〇〇	九八・〇〇		
九〇・〇〇	九〇・〇〇	九一・〇〇	九一・〇〇	九二・〇〇	九二・〇〇	九二・〇〇

天津對日輸出爲替相場 (三十日サイド)

備考 (金百圓に對する天津兩相場、即ち銀行圓賣、天津兩買の相場である。)

一	二	三	四	五	六	七	八
月	月	月	月	月	月	月	月
七二・ ^天 / _九	七一・〇〇	七四・ ^天 / _三	七二・ ^天 / _三	六九・ ^天 / _四	六八・ ^天 / _四	六九・〇〇	六九・ ^天 / _四
六九・〇〇	六九・ ^天 / _三	七〇・ ^天 / _四	六八・〇〇	六四・〇〇	六四・〇〇	六六・〇〇	六五・ ^天 / _三
六七・ ^天 / _四	六八・ ^天 / _三	六八・ ^天 / _三	七〇・ ^天 / _三	六八・ ^天 / _四	六八・ ^天 / _四	七四・〇〇	七六・〇〇

第七章 獸骨及骨粉の輸出状況

第七章 獸骨及骨粉の輸出状況

高 雄	天 津	倫 敦	合 計
三〇七			二二四九
			三三三三
			一三六八
			五〇〇九
			七〇〇
			三七七四
			二六〇九
			二七五二
			三二四二
			四八八五
			一九七九
			三九〇九

九〇

一、骨粉運賃及輸出諸掛 (一英噸に付價格單位元)

輸 出 稅	五・〇〇
貨 物 稅	〇・四五
運 賃	四・七〇 (阪神迄)
埠 頭 費	〇・四一
運 搬 雜 費	〇・三四
手 數 料	〇・一〇
計	一一・〇〇

二、獸骨及骨粉輸出業者

實 生 公 司	臺西三路二四號
高 橋 商 會	濟陽路一八號
車 田 洋 行	廣州路三三號
清 喜 洋 行	邱縣路七七號

興亞起業株式會社
新 泰 號

吳淞路二五號
河南路四號

第五節 其他各港輸出狀況

滿洲及北支那の主要港を除く其他各港に於ても年々少量宛の輸出を見てゐるが、前記主要各港に比しては極めて微々たるものである。年一千擔以上輸出を見るもの龍口、煙臺、重慶、九龍の諸港を擧げるのみである。然して之等諸港より輸出さるゝ獸骨も殆んど日本内地主として鹿兒島に仕向けられつゝあり、今參考までに全支那各港に於ける(南滿三港、天津、青島を除く)輸出數量を掲ぐれば次の如くである。

但し左表は海關統計より採りたるものにして、即ち各海關に於て課稅せる數量であるから、實際は同表數量よりも多額に昂るものと推せらる。

其他各港獸骨輸出數量 (單位擔)

港 名	年 次	一九一九年	一九二〇年	一九二一年	一九二二年	一九二三年	一九二四年	一九二五年	一九二六年	一九二七年	一九二八年
漢 口		一〇,二七二	二七,七二一	二九,二五七	一四,九五〇	二六,一四九	一八,三六六	四〇	四九	元	二,六五七
上 海		二,〇〇九	一八,四三三	一五,三七三	一六,〇八三	二四,〇八九	二八,三三三	二〇,九八八	一三,三二二	一三,三二二	一〇,一五三
秦 皇 島		二,六六八	六,六五								
龍 口		一,〇八一	一,一五七	九〇二	七五五	一,五五	一,〇九七	一,五四一	二,一三三	二,八八	二,六七三
煙 臺		五,九四四	二,九三	五,〇七九	三,九八	四,五〇	五,三〇〇	四,九〇〇	七,五三	四,五〇	五,七六一

第七章 獸骨及骨粉の輸出狀況

九一

「附録」

日本内地に於ける獸骨及骨粉の需給狀況

『附 録』

日本内地に於ける獸骨及骨粉の需給狀況

第一章 獸骨使用の沿革

日本内地に於て最初に獸骨を肥料として使用したのは鹿兒島縣にして、古來獸骨肥料を山建やまたけと謂ひ、今尚ほ此の稱ありと云ふ。其の使用は遠く約百四十年前永安年間（一七七二年——一七八〇年）薩摩國給黍郡門之浦村（今の川邊郡知覺村）の一商佐奈賀文右衛門（後仲覺兵衛と云ふ）の主唱にて現今の穎娃村石垣の同族間にて、之を粉碎して茶種子圃に施さしめたる處、肥效著しきものを發見された、之れ即ち鹿兒島縣内獸骨肥料使用の嚆矢である。

爾來之を見聞したる者が各所に於て使用するに至り、今より約九十年前天保年間、一八三〇年——一八四三年）黒岩政右衛門なる者が一の山建座（獸骨取扱所）を設けて、廣く其の原料を關東諸國の都邑に求め、縣内肥料の供給に努力したならば其の國益著大なることを藩主に建言した處、幸に採用せられて天保十四年藩主自ら富民館と稱するものを當市内に置いて事務を執り、支座（支店）を藩内各地に置くに至り、施用の途大いに擴まつたと謂ふ。後に富民館は其の名を農事會社と改め、更に明治十四年養穀社と改稱するに至つた。

當時鹿兒島縣内にあつても獸骨は厘毛の價値なきものとして山野に遺棄せられ、些かも顧られなかつたものを、藩主

の手に集收され必要品として歓迎せらるゝに至つた事は、實に獸骨肥料沿革史に特筆大書すべきものにして、現今鹿兒島縣に於て特有の肥料として目せられ、其の製造額は消費高と共に超然として他府縣の第一位を占むることは、蓋し其の所以なきにあらずである。然るに王政維新の後、廢藩と共に其の取引は民間の自由に歸し、且つ明治五年頃より之を粉碎して販賣することとなり、其の需要は逐年増加するに及び、漸く内地産の原料のみにては不足を告げ、依つて之を遠く朝鮮、滿洲、支那に仰ぐに至り、爾來製造方法も亦大いに改善刷新を加へられ、終に今日の隆盛を見るに至つたのである。

第二章 獸骨の輸移入狀況

第一節 日本内地に於ける輸移入狀況

内地に於ける獸骨の生産のみにては不足を告ぐる結果として、之を外國(就中滿洲支那)に仰ぐこととなり、明治十七八年當時より之が輸入を見るに至つた。當時の輸入高は極めて少く又適確なる統計なき爲め、茲に掲ぐることは出來ないが明治三十年頃は數量一千五百萬斤、價額二十萬圓の輸入を見、其の後漸時輸入額増加し大正九年に於ては六千萬斤を突破し、輸入數量の最高記録を示すに至つた。爾後輸入額は多少減少したる傾向を示してゐるが、其の反面蒸製骨粉として多額の輸入を見てゐるから需要を減じたる結果でないことは勿論である。現在に於ては毎年五千五百萬斤内外の輸入を見、其の價格約三百五十萬圓内外である。

右の外朝鮮よりも年々數百萬斤の移入があるが、滿洲、支那に比較すべき數字ではなく、日本内地總輸入額の八、九割迄は殆んど滿洲及び支那産の獸骨が占めてゐる。尙此の外北米、アルゼンチン、濠洲等よりも輸入されてゐるが、之等は主として齒磨用刷毛及び其の他の製造原料に供せられ、其の殘屑を肥料として使用されるので、其の數量は極く僅少である。今左に明治二十九年より最近に至る獸骨の内地總輸入高を掲げて其の一般を窺はんとす。

日本内地獸骨輸入數量及價格累年表

年	次	輸 入 數 量	價 額	單 價(百斤當)
明 治 二 十 九 年		九八二一二八三斤	一二六八六五円	一・二九二

第二章 獸骨の輸移入状況

年次	数量	價格
明治三十四年	1,231,132	257,147
明治三十九年	2,975,954	855,537
大正元年	4,769,417	1,358,395
同	3,816,100	1,337,326
同	5,438,500	2,302,187
同	3,952,800	2,046,000
同	5,306,870	3,147,000
同	5,445,100	3,626,238
同	5,616,800	3,608,979
同	6,182,400	3,421,630
昭和二年	5,247,130	2,856,000
昭和三年	5,445,100	3,626,238
昭和四年	5,306,870	3,147,000
昭和五年	5,438,500	2,302,187
昭和六年	3,816,100	1,337,326
昭和七年	2,975,954	855,537
昭和八年	4,769,417	1,358,395
昭和九年	5,247,130	2,856,000
昭和十年	5,445,100	3,626,238
昭和十一年	5,306,870	3,147,000
昭和十二年	5,438,500	2,302,187
昭和十三年	5,616,800	3,608,979
昭和十四年	6,182,400	3,421,630
昭和十五年	5,247,130	2,856,000
昭和十六年	5,445,100	3,626,238
昭和十七年	5,306,870	3,147,000
昭和十八年	5,438,500	2,302,187
昭和十九年	3,816,100	1,337,326
昭和二十年	2,975,954	855,537
昭和二十一年	4,769,417	1,358,395
昭和二十二年	5,247,130	2,856,000
昭和二十三年	5,445,100	3,626,238
昭和二十四年	5,306,870	3,147,000
昭和二十五年	5,438,500	2,302,187
昭和二十六年	5,616,800	3,608,979
昭和二十七年	6,182,400	3,421,630
昭和二十八年	5,247,130	2,856,000
昭和二十九年	5,445,100	3,626,238
昭和三十年	5,306,870	3,147,000
昭和三十一年	5,438,500	2,302,187
昭和三十二年	5,616,800	3,608,979
昭和三十三年	6,182,400	3,421,630
昭和三十四年	5,247,130	2,856,000
昭和三十五年	5,445,100	3,626,238
昭和三十六年	5,306,870	3,147,000
昭和三十七年	5,438,500	2,302,187
昭和三十八年	5,616,800	3,608,979
昭和三十九年	6,182,400	3,421,630
昭和四十年	5,247,130	2,856,000
昭和四十一年	5,445,100	3,626,238
昭和四十二年	5,306,870	3,147,000
昭和四十三年	5,438,500	2,302,187
昭和四十四年	5,616,800	3,608,979
昭和四十五年	6,182,400	3,421,630
昭和四十六年	5,247,130	2,856,000
昭和四十七年	5,445,100	3,626,238
昭和四十八年	5,306,870	3,147,000
昭和四十九年	5,438,500	2,302,187
昭和五十年	5,616,800	3,608,979
昭和五十一年	6,182,400	3,421,630
昭和五十二年	5,247,130	2,856,000
昭和五十三年	5,445,100	3,626,238
昭和五十四年	5,306,870	3,147,000
昭和五十五年	5,438,500	2,302,187
昭和五十六年	5,616,800	3,608,979
昭和五十七年	6,182,400	3,421,630
昭和五十八年	5,247,130	2,856,000
昭和五十九年	5,445,100	3,626,238
昭和六十年	5,306,870	3,147,000
昭和六十一年	5,438,500	2,302,187
昭和六十二年	5,616,800	3,608,979
昭和六十三年	6,182,400	3,421,630
昭和六十四年	5,247,130	2,856,000
昭和六十五年	5,445,100	3,626,238
昭和六十六年	5,306,870	3,147,000
昭和六十七年	5,438,500	2,302,187
昭和六十八年	5,616,800	3,608,979
昭和六十九年	6,182,400	3,421,630
昭和七十年	5,247,130	2,856,000
昭和七十一年	5,445,100	3,626,238
昭和七十二年	5,306,870	3,147,000
昭和七十三年	5,438,500	2,302,187
昭和七十四年	5,616,800	3,608,979
昭和七十五年	6,182,400	3,421,630
昭和七十六年	5,247,130	2,856,000
昭和七十七年	5,445,100	3,626,238
昭和七十八年	5,306,870	3,147,000
昭和七十九年	5,438,500	2,302,187
昭和八十年	5,616,800	3,608,979
昭和八十一年	6,182,400	3,421,630
昭和八十二年	5,247,130	2,856,000
昭和八十三年	5,445,100	3,626,238
昭和八十四年	5,306,870	3,147,000
昭和八十五年	5,438,500	2,302,187
昭和八十六年	5,616,800	3,608,979
昭和八十七年	6,182,400	3,421,630
昭和八十八年	5,247,130	2,856,000
昭和八十九年	5,445,100	3,626,238
昭和九十年	5,306,870	3,147,000
昭和九十一年	5,438,500	2,302,187
昭和九十二年	5,616,800	3,608,979
昭和九十三年	6,182,400	3,421,630
昭和九十四年	5,247,130	2,856,000
昭和九十五年	5,445,100	3,626,238
昭和九十六年	5,306,870	3,147,000
昭和九十七年	5,438,500	2,302,187
昭和九十八年	5,616,800	3,608,979
昭和九十九年	6,182,400	3,421,630
昭和百年	5,247,130	2,856,000

備考

- 一、本表は大蔵省編外國貿易年表に依る。
- 二、明治三十年以前は價額は銀圓、同三十一年以後金圓。
- 三、大正十二年は震災の爲七、八月分を含まず。

仕出港別獸骨輸入數量價格表

(數量單位、擔
價格單位、圓)

支那	大正十四年		昭和元年		昭和二年	
	數量	價格	數量	價格	數量	價格
大連	306,808	1,769,000	381,133	1,888,000	386,666	1,981,000

第二節 鹿兒島に於ける輸移入状況

支那	數量	價格	數量	價格	數量	價格
大連	201,183	1,175,000	158,069	854,000	141,978	702,000
香港	7,649	41,000	15,495	73,000	3,782	16,000
英領印度	847	3,000	1,999	11,000	—	—
英領緬甸	64	3,000	1,647	6,000	4,940	16,000
英領暹羅	—	—	1,857	5,000	668	1,000
英領吉羅	659	1,000	3,859	4,700	8,208	9,200
獨逸	—	—	42	4,000	1,192	13,000
北米	13,851	133,000	12,771	136,000	3,908	48,000
亞細亞	3,519	49,000	9,845	109,000	11,531	140,000
伯利爾	—	—	—	—	205	4,000
南米	1,078	17,000	1,793	28,000	2,567	28,000
南米諸國	2,010	28,000	27,603	242,000	15,784	107,000
濠洲	653	14,000	—	—	84	8,000
其他	561,680	3,608,000	618,924	3,422,000	534,713	2,856,000
合計	—	—	—	—	—	—

鹿兒島港は大正八年七月開港場となり、爾來直接外國產獸骨の輸入を見るに至つたが、其以前に於ては之れ等獸骨を

第二章 獸骨の輸移入状況

積載せる船舶は長崎及び門司に寄港し、檢疫竝に税關の手續きを了し、鹿兒島に回航若しくは兩港より陸路運送せられてゐた。

鹿兒島港に直接獸骨の輸入されたのは大正八年八月からであつて、大正八年度に於ては左程の輸入もなかつたが、大正九年度には三千五百餘萬斤の輸入を見、爾來漸時増加して大正十四年には數量約五千萬斤、價格二百九十萬圓に達し本邦獸骨全輸入額の約八、九割を占むるの盛況を呈した。而して鹿兒島港に輸移入する獸骨の仕出港は主として天津、大連、上海、漢口、青島等であるが、此の内青島は他各港に比し極めて僅少である。朝鮮よりは主として仁川、鎮南浦釜山、群山、木浦等より移入されてゐる。

鹿兒島港輸入數量及價格累年表

年次	輸 入 數 量	價 格	單 價
大 正 八 年	七、二六七、二〇〇斤	四六八、三二四円	六・四四四
同 九 年	三五、一五一、八〇〇	二、九八七、三〇九	八・五〇〇
同 十 年	三七、二六七、五〇〇	一、五八五、六七二	四・二五五
同 十 一 年	二九、四一五、〇〇〇	一、三二七、六一二	四・五一五
同 十 二 年	四〇、〇九六、八〇〇	一、八五二、六七五	四・六二五
同 十 三 年	四三、九七二、二〇〇	二、四九四、二二六	五・六七二
同 十 四 年	四九、〇七四、〇〇〇	二、八五八、二八〇	五・八〇六
昭 和 元 年	四八、七六一、三〇〇	二、四八九、六九二	五・一〇五

同 二 年	三九、七二一、四〇〇	一、九九七、四一八	五・〇三〇
同 三 年	三九、七五〇、一〇〇	一、九四二、四六一	四・八八七

備考 一、鹿兒島税關支署統計に依る。

二、朝鮮よりの移入を除く。

三、大正八年度は九月以降の分である。

鹿兒島港獸骨の主要仕出地別輸入數量

仕出地	大正十三年度	大正十四年度	昭和元年度
天 津	九、五九三、二〇〇斤	二〇、一六七、五二〇斤	九、八四五、八一五斤
大 連	一六、八四三、〇〇〇	一四、五二一、六九一	一三、三九一、七五三
上 海	一、四〇一、七〇〇	八、四八〇、四八〇	一八、〇一三、四一九
漢 口	四、八八〇、二〇〇	八、六四四、二五二	六、九四二、二七一
青 島		五、七一〇	

備考 本表は主要仕出港にて他諸港を除く。

鹿兒島港に於ける獸骨月別輸入額

月 別	大正十三年	大正十四年	昭和元年	昭和二年
一 月	四五七七、〇〇〇斤	五、〇六一、九五〇斤	二、八六八、三三二斤	四、一九七、二〇〇斤

第二章 獸骨の輸移入状況

第二章 獸骨の輸移入状況

年	月	数量	単	價(百斤當)
二	月	四三九二五〇〇	三、二六九、一六三	四、七四九、〇〇〇
三	月	五三三四七〇〇	三、四五一、一八七	三、六四二、二〇〇
四	月	四八〇八七〇〇	二、八五七、〇二二	四、九八一、九〇〇
五	月	九七六、一〇〇	一〇、五四四、四一五	七、五〇六、六〇〇
六	月	四、〇六五、九〇〇	四、九四八、六四二	四、八〇一、三〇〇
七	月	三、〇三八、〇〇〇	三、六九九、三三〇	二、九四三、八〇〇
八	月	一、七四八、四〇〇	三、五一四、六五六	一、五二九、二〇〇
九	月	四二九、二〇〇	八六〇、〇〇一	二、五二九、九〇〇
十	月	二、八三〇、一〇〇	二、六二二、九三一	一、四四九、五〇〇
十一	月	三、九七九、三〇〇	五、一六五、一五	一、五七一、七〇〇
十二	月	七、七九二、三〇〇	六、四一九、七四二	二、〇八六、一〇〇
計		四三、九七二、二〇〇	五〇、一九四、三三六	三、九七一、四〇〇

備考 本表中大正十三年は朝鮮よりの移入を除き、大正十四年以降は朝鮮よりの移入も加算す。

第三章 骨粉の輸移入状況

第一節 日本内地に於ける輸移入状況

本邦内地に於ける骨粉の輸入は、何時頃よりあつたか判然しないが統計の示す處に依つて推察するに明治三十年頃より輸入せられたる模様である。

明治三十年より同三十七八年頃までは左程多量の輸入も見なかつたが、三十九年以後年々増加し大正九年に於ては數量八千四百萬斤、價額八百五十萬圓の巨額な輸入を見たが、同年は日本内地に於て最も好況時代のことゝて、翌十年は急轉四千九百萬斤に激減した、以後は頗る順調にて漸増を辿り大正十四年は七千二百萬斤、價額四百六十萬圓の輸入を見た。

國別の輸入額は支那、滿洲、英領印度の順にして其の他より來るものは極めて僅少である。内地各港別輸入額は神戸最も多く、横濱、大阪、門司に輸入するものに次ぐ状態である。

内地に於ける骨粉輸入額

年	次	輸 入 數 量	價 格	單 價 (百斤當)
明 治 三 十 年		三五七、一〇〇斤	七、一五五	二、〇〇四
同 三 十 一 年		三、三三二、四四二	一〇、一〇一	三、〇三一
大 正 元 年		一七、二九一、五〇〇	六、六八、六四九	三、八六七

第三章 骨粉の輸移入状況

第三章 骨粉の輸移入状況

年次	数量	價格	單價 (價百斤當)
大正五年	二二六五六、三〇〇	八二六、五六一	三、四九四
同 四年	四八八五八、八〇〇	二、三七五、七〇〇	四、八六〇
同 三年	六七九二〇、七〇〇	三、七八九、〇〇〇	五、五七八
同 二年	六七五二六、二〇〇	三、八二九、〇〇〇	五、六七四
同 一年	七一、九二八、八〇〇	四、四六二、九五九	六、二〇五
昭和元年	七一、七五九、八〇〇	四、五八一、七三〇	六、三八五
和 元	六一、〇〇七、二〇〇	三、七一〇、七九五	六、〇八二
同 二年	五五、三一五、〇〇〇	三、〇五九、二六九	五、五三一

但し昭和二年は十月迄の統計

第二節 鹿兒島に於ける輸移入状況

鹿兒島に於ける獸骨の輸入は他港の約九割を占むるも、骨粉は極めて少なく獸骨に比し殆んど云ふに足らず、大正三年には數量二百萬斤、價額十二萬圓、同十四年には約九十萬斤、價格額五萬圓餘に過ぎず、近年當地の滿蒙殖産株式會社に於て蒸製骨粉の輸入を爲すも之亦極めて僅少である。今其の數量を示せば左表の如くである。

鹿兒島港に於ける骨粉の輸入額

年次	數量	價格	單價 (價百斤當)
大正五年	九二四五〇〇斤	五〇、九六七 ^円	五、五三〇 ^円
同 四年	一、八八六、四〇〇	一、二二、九六七	六、四八三
同 三年	八四九、八〇〇	五二、五四〇	六、一八二
同 二年	三、五七九、四〇〇	二一六、〇六九	六、〇三六
同 一年	一、一五、四〇〇	六六六、二二一	五、九七二

第四章 骨粉の生産状況

第一節 概 説

骨粉原料としては支那産獸骨、内國産獸骨を主として使用してゐる事は前述の如くである。鹿兒島縣に於ては以前は内國産獸骨を主として使用し來つたが、骨粉の需要増加に伴ひ、内地産のみにては不足を告ぐる結果、之が補充を滿洲及び支那産に仰ぐに至つた。鹿兒島縣肥料検査所の調査に依れば同縣骨粉原料の約九割は滿洲及び支那産獸骨を使用し、内國産獸骨は大阪、廣島物を主とし其の他宮崎、熊本、福岡縣のものを使用してゐる。

鹿兒島縣下獸骨粉の製造は伊佐、熊毛、大島の各郡を除く市郡に於て之が生産を見るも、最も多きは鹿兒島市にして全産額の六割を占め、之に次ぐは鹿兒島、川邊の兩郡である。

第四章 骨粉の生産状況

骨粉製造工場数は現在百三十七にして、工場は其の動力として、電力、吸入瓦斯「エンヂン」水車等を使用してゐるが就中最も多く使用されつゝあるは水車にして電力之に次ぐ状態である。粉砕機は全部撞搗式にして篩に掛け精粗を區別する、篩は全部金網にして南薩地方の如く肥料の分解早き地方は、大目(小指頭大のもの)のものを使用し、其の他の地方は極めて微細のものを望む關係上、小目のものを使用する傾向である。

骨粉の製造能力は一日平均杵一本に付き六十三、四斤にして、骨粉一俵の生産費は地方に依り多少の差はあるが、鹿兒島附近の工場にて調査せる所に依れば大約次の如くである。

骨粉一俵生産費調(正味十二貫)

種目	數量	價額	備考
原料 獸骨	八十斤	三圓六十錢	獸骨より骨粉十二貫(七十五斤)を製するには原料獸骨八十斤を要す、時價百斤五圓六十錢として
吹	一箇	二十錢	吹の内部に挿入して骨粉の漏脱を防ぐ
漚	一枚	三錢	
繩		四錢	
荷		五錢	
工		十錢	動力を含む
人		十七錢	
賃		十二錢	
計		四圓三十八錢	

右の如く骨粉一俵(七十五斤)の生産費は四圓三十八錢なるが、昭和二年八月現在に於ける骨粉一俵(七十五斤)の相場は四圓六十錢なるを以つて、當時に於ける製造費及骨粉の價格を標準とする時は一俵に付き二十二錢の利益となる譯である。

其他蹄角粉、配合骨粉、鯨骨粉蒸製骨粉等があるが、之等は内地に於ては製造高極めて僅少にして、只原料の差異と製造法の多少異なるのみで獸骨粉と大差ない。

第二節 内地に於ける生産状況

本邦内地に於ける骨粉の生産は、明治三十五年以前に於けるものは詳かならざるも、同三十六年以降のものに就て之を見るに、三十六年に於ては數量二百九十萬貫、價格六十五萬圓に過ぎなかつたが、以後逐年増加し大正二年に於ては數量六百七十萬貫、價格百八十萬圓に達し、同三年より稍減少したが大正八年には財界の好況に恵まれて著しく増加し數量に於て一千萬貫、價格六百萬圓となるに至つた。其の後稍々減少の傾向を示したるも年八百萬斤内外の生産を保有してゐる。而して内地各府縣中最も多きは鹿兒島縣にして大正十四年度の全生産額の約八割八分以上を同縣が占むるの状況を示した。之に次ぐものは宮崎縣であるが其生産は年額十五萬圓内外程度に過ぎず、其の他の府縣は極めて微々たるものである。

今内地總生産高を掲ぐれば左の如くである。

内地に於ける骨粉の生産高

年次	数量	価格	単価(一貫目當)
明治三十六年	二八四五、五四一	六五三、四八一	〇・二二五
同三十七年	五一八五、八九九	一、三九七、五九六	〇・二六九
大正元年	六七一五、〇八二	一、六五二、八三〇	〇・二四六
同二年	六、二三七、三六〇	一、五三一、八〇九	〇・二四五
同三年	七、九六一、八九〇	三、〇六二、〇一四	〇・三八五
同四年	七、六七六、五八三	三、一〇〇、九六三	〇・四〇四
同五年	八、八〇七、八五一	三、七〇三、六二四	〇・四二五
同六年	八、三八五、八一九	三、六九九、七三二	〇・四四一
同七年	九、二六九、七七五	四、三一〇、五九四	〇・四六五
昭和元年	九、七二二、三四二	四、一四八、三六五	〇・四二七
同二年	八、八〇六、七七八	三、四九三、〇二七	〇・三九七
同三年	八、九六二、二一〇	三、四九二、三五八	〇・三九〇

備考 農林省統計表に據る。

尙ほ昭和三年中に於ける各府縣別骨粉の製造高を示せば左の如くである。

昭和三年府縣別骨粉製造高

縣別	製造高	價額	單價(一貫目當)
北海道	三六、四七九	八、七九五	〇・二四一
青森縣	三、二四〇	一、三六〇	〇・四一九
岩手縣	八七、六九〇	二六、七五四	〇・三〇五
宮城縣	一四、四七〇	五四、三四一	〇・三七五
山形縣	一六、八〇〇	六、六二四	〇・三九四
福島縣	六〇〇	三、六〇〇	〇・六〇〇
茨城縣	二二、五九四	九、〇二五	〇・三九九
栃木縣	三、二〇〇	四、〇〇〇	〇・一二五
千代田縣	三五三、〇五五	一一三、二九一	〇・三三一
東京府	六二、五一六	二七、七一九	〇・四四三
神奈川縣	二四、一五〇	八、一五〇	〇・三三七
新潟縣	五、六〇七	一、七二六	〇・三〇八
石川縣	一一九、四六一	四四、六八二	〇・三七一
長野縣	三六、〇三〇	一二、八八〇	〇・三五七
岐阜縣	四、五九七	一、六三〇	〇・三五四
三重縣	九、五一〇	二、八九二	〇・三〇四
京都府	一四九、二〇九	四九、三六〇	〇・三三一
大阪府	六〇	一六	〇・二六七
兵庫縣	三二六、七七〇	一〇八、七四四	〇・三三三
奈良縣	四八、一七一	一六、八五九	〇・三五〇

第四章 骨粉の生産状況

鹿	宮	大	熊	福	高	廣	鳥	合
兒	崎	分	本	岡	知	島	取	
島								計
縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣
二五〇	三六、四五四	一一、二〇〇	四八、一一〇	四、二〇〇	三、〇〇〇	二六〇、五七二	七、一五六、六八三	八、九六四、九一〇
四三	一三、四八八	六六〇	一五、九八九	二、〇〇〇	一、三五〇	一〇八、二一九	二、八五四、九九八	三、四九二、三五八
〇・一七二	〇・三七〇	〇・五五〇	〇・三三二	〇・四七六	〇・四五〇	〇・四一五	〇・三九九	〇・三九〇

備考 農林省統計年表に據る。

第三節 鹿兒島縣に於ける生産状況

鹿兒島縣に於ては最初骨を焼いて所謂骨灰として肥料に使用してゐたが、明治二十年前後より之を粉碎して骨粉として肥料に使用するに至つた。本縣に於ける骨粉の生産額は全國の約九割近くに達し、内地に於ては斷然首位を占めてゐる。今之が生産の趨勢を見るに明治三十五、六年頃は二百萬貫内外に過ぎなかつたが、其の後逐年増加し、大正十四年に於ては約九百萬貫、價額四百二十萬圓に達するの盛況を呈した。

而して骨粉製造業は本縣に於ける主要工業の一となり、本縣工業品總價額六千萬圓の約一割近くに達し、其の生産額位から見て織物、酒類、蠶絲に次ぐの状況を呈すに至つた。

尙本縣に於て製造せらるゝ、骨粉の種類は獸骨粉、配合骨粉、蹄角粉、鯨粉等であるが、就中最も多きは獸骨粉にし

て、骨粉全生産額の九割七分以上を占め、其の他は極めて僅少である。

骨粉生産數量累年表 (單位貫)

年	次	獸骨粉	鯨骨粉	蒸製骨粉	蹄角粉	蹄角骨炭末	合 計
明治	三十五年	一、七四二、二五一	一六四、四三三	—	—	三四	一、九一〇、五二八
同	四十年	三、九一八、三五〇	九一、九八〇	—	—	一〇、九四五	四、〇二一、二七五
大	正元年	四、五二〇、七九五	七〇、七九九	二九八、二二五	三七、七二五	五一、七〇	四、九三二、六〇四
同	五年	一、一六三、三三三	五、九六三	七、七二〇	四、七九一	—	一、一八一、八二七
同	十年	二、六五七、六〇七	二二、三九六	—	三三〇	—	二、六七九、三三三
同	十四年	八、九〇九、八一九	二、三六〇	一九〇、八五四	三、五〇〇	—	九、一〇六、五八三
昭	和元年	八、八七六、六六〇	一、二六七	二〇六、三九六	四、一四七	—	九、〇八八、四七〇
同	二年	不詳	不詳	不詳	不詳	—	八、一九六、七六七

備考 鹿兒島商工會議所年報に據る。

骨粉生産價格累年表 (單位圓)

年	次	獸骨粉	鯨骨粉	蒸製骨粉	蹄角粉	蹄角骨炭末	合 計
明治	三十五年	四〇九、〇八九	五〇〇、六一	—	—	九	四五九、一五九
同	四十年	一、〇三七、三三七	二八、三三五	—	—	二、九二四	一、〇六八、五九六

第四章 骨粉の生産状況

第四章 骨粉の生産状況

年次	数量	価格	数量	価格	数量	価格
大正元年	一、一五、三四五	一九九〇三	七、一五、五〇	一一、五〇八	一、三、五七	一、三、一、六六三
同五年	四、六八、八三五	二二、八八九	三七、六三八	一六、七五二		四、七、六、五九四
同十年	六、八五、三二八	五五、四四八		一、〇〇〇		六、九〇、九六三
同十一年	六、八三、五八一	二二、五四八		八八〇		六、八六〇、二四五
同十二年	七、九二、七九〇	二六、八九六		四〇〇		七、九五四、八八六
同十三年	七、九三、三八四	一〇、三三三	二、三六、一六〇	四、二七一		八、一七四、六二五
同十四年	二、七九、八九五	九、四七九		三三〇		二、八〇四、五九四
同十五年	三、三三、八二五	一一、〇五二		二〇〇		三、三九七、〇七
同十六年	三、五五、五一七	四、三五一	九、八、〇六八	二、五三四		三、六六〇、四七〇
同十七年	四、一七、〇六七	一、一九〇	八、二、五五四	二、五二〇		四、一、五、六、九四〇
昭和二年	三、八〇、四二八	不詳	八、三、九三〇	二、九〇三		三、八、九、六、四九
同	不詳	不詳	不詳	不詳		三、一、七、五、一、五四

備考 鹿兒島商工會議所年報に據る。

尙ほ昭和二年度に於ける鹿兒島縣各郡市別骨粉の生産數量及價格を示せば左の如くである。

昭和二年各縣市別生産額表

郡市別	數量	價格	數量	價格
鹿兒島市	四、六四〇、五五二	一、八五五、九八三	一、〇、四、一、六、二、四	四、一、二、二、八
鹿兒島郡				

郡市別	數量	價格	數量	價格
揖宿郡	四四一、二四一	一六六、六八七	六四、三三三	二、六、九、九、八
川邊郡	六七四、一〇三	二五九、〇七二	八二、七五六	三、七、二、三、六
日置郡	三五九、一九六	一四三、九〇八	六八、五九八	二、五、七、七、二
薩摩郡	二〇七、二三六	九一、四六五		
出水郡	五七〇、四八	二四八、七九	八一、九六、七、六七	三、二、七、五、一、五四
伊佐郡				
計				

第五章 骨粉の消費状況

第一節 日本内地に於ける消費状況

本邦内地よりは骨粉の輸移出なきを以つて、内地に於ける骨粉の生産額及び輸移入額を合算せるものを全消費額と見做すことが出来る。今其の推定消費額を掲記すれば左の如くである。

骨粉の内地總消費額推定累年表

年次	輸移入額		内地生産額		推定消費額	
	數量	價格	數量	價格	數量	價格
大正元年	二、七五〇、七一九	六六八、六四九	六、七二五、〇八二	一、六五二、八三〇	九、四六五、八〇一	二、三、一、四、七、九
同五年	三、七七八、九六二	八二六、五六二	六、三三七、三六〇	一、五三一、八〇九	一〇、〇、一、六、三、三、三	二、三、五、八、三、七〇

第五章 骨粉の消費状況

年	大正九年	大正十年	大正十一年	大正十二年	大正十三年	大正十四年	昭和元年	昭和二年
消費額	一三、四〇四、四〇九	七、八〇四、九二〇	一〇、八四九、九五二	一〇、七八六、九三三	一一、四九〇、二四四	一一、四六三、二一一	九、七四五、五五九	八、八三六、二六二
生産額	八、五〇〇、一六六	二、三三五、七〇〇	三、七八九、〇〇〇	三、八二九、〇〇〇	四、四六二、九五九	四、五八一、七三〇	三、七二〇、七九五	三、〇五九、二六九
消費差	七、九〇四、二四三	五、四六九、二二〇	七、〇六〇、九五二	七、〇五七、九三三	七、〇二七、二八五	六、九四一、四八一	六、〇二四、八〇四	五、七七六、九九三
輸入額	五、九五四、七九九	三、〇六二、〇一四	三、二〇〇、九六三	三、七〇三、六二四	三、六九九、七三二	四、三二〇、五九四	四、一五〇、〇〇〇	三、四九三、〇二七
輸出額	二〇、九〇三、二二九	一五、七六六、八一〇	一八、五二六、五三五	一九、五〇四、七八四	一九、八七六、〇四三	二〇、七三三、九八六	一九、四五五、五五九	一七、六四三、〇四〇
消費差	一四、四五四、九六五	五、四三七、七二四	六、八八九、九六三	七、五三三、六二四	八、一六二、六六一	八、八八九、三三四	七、八六〇、七九五	六、五五二、二九六

右表に依つて内地に於ける骨粉の消費趨勢を見るに、其の數量に於ては大正元年に九百四十餘萬貫の消費を示し、以降其の量を増加し大正九年には一躍三千萬貫を突破し、其の價額も一千四百五十萬圓を示したが、同年は内地財界の最も好況時にして、諸物價暴騰し爲めに骨粉相場も普通一貫三、四十錢の所、輸入品六十三錢強、内地生産品七十九錢強と暴騰したる結果に依る。翌大正十年には一千五百萬貫に減じ價額も五百四十三萬圓（一貫當り三十五錢）を示すに至つた。其の後多少の増減はあつたが、大體に於て現在の消費量は約二千萬貫内外を示し、價額も大約七、八百萬圓内外を示しつゝある。之等骨粉の用途は殆んど全部肥料用と見做して差支へないが、一少部布は精糖用骨炭の原料に供せらるると云ふ。

内地に於ける骨粉消費高の最も多き地方は鹿児島縣にして、大正十四年度に於ける同縣の總消費額は六百七十六萬貫價額約三百二十萬圓にして全國消費高の約三割強を占してゐる。鹿児島縣に亞いでは宮崎縣及び熊本縣にして、之に次ぐるものは山形、栃木、新潟、富山、岐阜の諸縣である、此の外北海道、青森、東京、神奈川、山梨、島根の諸縣等も多少の使用を見つゝあるが、之等の中生骨粉を使用する地方は鹿児島、宮崎、熊本縣等にして、其の他の諸縣は蒸製骨粉を主として使用して居る。

第二節 鹿児島縣に於ける消費状況

鹿児島縣に於て生産せらるゝ骨粉は、全部同縣に於て消費せらるゝには非ず、其の内幾分は縣外に搬出せられてゐる其の搬出高は大正七年度に在りては數量約百萬貫、價額四十五萬圓内外であつたが、大正十五年に於ては數量約三百萬貫價額約百四十萬圓に激増した。仕向地としては主に宮崎、熊本、福岡の諸縣にして、其の内最も多額の搬出先は宮崎縣である。

鹿児島縣に於ける骨粉消費の趨勢を見るに、明治三十五年頃は約二百萬貫臺に過ぎず、以降數年間は一進一退にして増減の見るべきものはなかつたが、大正元年頃より漸増の趨勢を辿り、大正六年には四百二十萬貫となり、大正八、九年頃より五百萬貫臺を突破し、現今に於ては更に六百萬貫を突破するの盛況を呈した。其の價額は約三百萬圓にして明治三十五年に比すれば約六倍の増加を示してゐる。

縣下各郡の骨粉消費状況を見るに、大島、熊本兩郡を除く諸郡は大體に於て耕地面積に比例してゐる。

尚ほ鹿児島縣に於ける骨粉消費の金肥消費額に對する割合を見るに明治三十五年に於ては金肥消費額の六割八分に相當し、明治四十年頃の骨粉の消費額は金肥消費額の約七割となる。以後漸次低下し、明治四十三年頃は六割臺、同四十五年頃は五割、大正七年頃は四割臺、最近十四年に於ては金肥全消費額八百二十四萬圓に對し、骨粉消費額は約三百萬

第五章 骨粉の消費状況

圓にして、其率は三割六分に減少した。斯くの如く金肥消費額に對する骨粉消費額の比率が漸次低下せる原因は、近時農家の肥料知識向上し、逐年骨粉以外の過燐酸石灰、配合肥料等の如き化學肥料を使用する傾向あるが爲である。今左に大正元年より最近に至る同縣消費額を掲げて其の一般を窺はんとす。

鹿兒島に於ける骨粉の消費高累年表

年次	數量	價額	年次	數量	價額
大正元年	三、七〇五、〇二五	九七九、一六五	大正十一年	五、三三二、二二八	二〇六八、三五五
同二年	四、一六六、七〇五	一、一八二、三三九	同十二年	五、五六二、五五〇	二、四四〇、〇一七
同三年	三、八八二、〇三八	一、一〇二、四七〇	同十三年	五、一四二、二四〇	二、四〇一、一六六
同四年	四、〇〇四、六三六	九九二、一六七	同十四年	五、五八五、三四〇	二、七二五、三五九
同五年	四、一九三、五三九	一、〇八二、五五九	同十五年	六、一一〇、〇五六	二、九六五、六三〇
同六年	四、二一六、一四〇	一、三五一、八九九	昭和元年	六、七五九、〇八六	三、一〇九、九三五
同七年	四、四二八、八九二	一九一七、九六三	同二年	六、二七一、一七三	二、六〇三、〇一一
同八年	五、一〇九、一三七	二、九六三、二六二	同三年	六、三〇一、七八一	二、五九三、三四三
同九年	四、九七一、〇四九	四、〇九六、六二二			

備考 鹿兒島縣肥料統計書、各年度分摘錄

鹿兒島骨粉の縣外搬出高推定 (單位貫)

年次	輸入數量	製造高	消費高	推定搬出高
大正十一年	三、九九四	六、九〇九、六三一	五、三三一、二二八	一、五八二、四九七
同十二年	一、四七六、八八三	六、八六〇、二四五	五、五六二、五五〇	一、二九七、六九五
同十三年	一、四七六、八八三	七、九五四、八八六	五、一四一、一四〇	二、九六一、四二九
同十四年	三、〇一、三四二	八、一七四、六二五	五、五八五、三四〇	二、八九〇、六二七
同十五年	一、三五七、七五一	九、一〇六、五八三	六、一一〇、五六六	三、一三〇、二七八
昭和元年	五、七七一、七八九	九、〇八八、四七〇	六、七五九、〇八六	二、九〇一、一七三
同二年	一、七八一、二七九	八、一九六、七六七	六、二七一、一七三	二、一〇三、七七三

以上搬出高推定の方法は輸入高に製造高を加算し、それより消費高を引去りたる殘數が即ち搬出高と推定したものに於て、元より適確なる搬出數量でない事は勿論であるが、大體に於て右の數字は確實に近きものと思はる。尙ほ仕向地は主として宮崎縣にして熊本、福岡の兩縣にも相當仕向けられつゝある。尙ほ鹿兒島縣内に於ける獸骨、骨粉の主なる取扱商を掲げれば左の如くである。

獸骨、骨粉の主なる取扱商

村上 吉太郎	鹿兒島市州崎町三	岩 井 洋 行	鹿兒島市沙見町八
江口 合名會社	同 築町五二二	滿蒙殖産株式會社支店	同 易居町四五
日華貿易委託株式會社	同 泉町二二二	佐藤 兼三郎	同 泉町八六

第五章 骨粉の消費状況

第五章 骨粉の消費状況

一一八

榮記商會	鹿兒島市泉町九二	(以上獸骨及骨粉輸入業者)
久保田新太郎	同 汐見町四三	稻松喜一郎 鹿兒島市住吉町二三八
鹿兒島肥料株式會社	同 小川町二	野口商店 同 築町三一
江口商店	同 五一	豐永長藏 同 堀江町五四
南州肥料合資會社	同 春日町二	佐藤商事合名會社 同 住吉町八一
福留彦七	鹿兒島郡谷山町中一八五	宮原商會 同 鹿兒島郡谷山町鹽屋一四六二
上野太郎吉	同 同鹽屋一四七五	南吉太郎 同 揖宿郡喜八村前の濱八三
平川徳兵衛	川邊郡萬世町小添二八	小田原春次 同 川邊郡萬世町唐仁原六一七〇
薩南肥料株式會社	同 川邊町田部田三、七三八	上床國義 同 日置郡東市來村伊作田二五六
小山田卯右衛門	薩摩郡平佐村平佐二六〇五	上原虎松 同 肝付郡鹿尾町高須二三三

(以上主なる骨粉製造業者)

昭和五年九月九日印刷
昭和五年九月十三日發行

定價金八拾錢

南滿洲鐵道株式會社總務部調査課

編輯人兼

佐田弘治郎

印刷人

大連市東公園町三十一番地
吾妻力松

印刷所

大連市東公園町三十一番地
株式會社 滿洲日報社印刷所

發行所

南滿洲鐵道株式會社

大連市紀伊町九十一番地

販賣所次

社團法人 中日文化協會

14.5
174

NO.

PATENTED NO. 119016

"F-M"

PAMPHLET BINDERS

are carried in stock in the following sizes

Catalog No.	High	Wide	Thick
851(菊倍)	30. cm. x	22.5cm. x	1cm.
852(四六倍)	26. " x	18.5 " x	1 "
853(菊)	22.5 " x	15. " x	1 "
854(四六)	18.5 " x	12.5 " x	1 "
855(特)	24. " x	15. " x	1 "

Special sizes are made to order

LIBRARY SUPPLIES IN ALL KINDS
F. MAMIYA & CO.
OSAKA-TOKYO-FUKUOKA

終